XDシナリオafterstory
『晴れ煌めく陽光』

nagato_12

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アプリゲーム戦姫絶唱シンフォギアＸＤシナリオ『翳り裂く閃光』二次創作ａｆｔｅｒｓｔｏｒｙ

小日向未来と手を繋ぎ合えた、ＩＦ世界の立花響。

胸のガングニールと引き換えに、自身の命を救われた彼女は『誰かと手を繋ぐこと』を思い出した。

たしかに残った手の温もりと、わずかな空疎感を胸に、前へと踏み出そうとする少女。

そこに、彼女を照らす『陽だまり』が現れる。

「響、遅れちゃったけど――ただいま」

これは、胸の歌を喪った少女が、喪ったモノを取り戻す物語。
少女の血には、歌が流れていた――。

◆このたび登録、初投稿になります。普段はピクシブで暮らしております。
こちらでもお見知りおき頂けましたら幸いです。

目　次

第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり
上 ―――― 1
第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり
中 ―――― 20
第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり
下 ―――― 40
第二章　雲滲む陽射と、差し込んだ光明
上 ―――― 63
第二章　雲滲む陽射と、差し込んだ光明
中 ―――― 97

第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり　上

人類を脅かす超常の災厄から、人命を守護する特異災害対策の本部にして、海中を進む潜水艦としての側面を併せ持っている《S．O．N．G．》の本部内には、人員たちが長期滞在が可能なようにいくつかの居住スペースが設けられている。

もちろんそれは、人類にとって守護の要たる唯一の対ノイズ兵器――《シンフォギア》の装者たちに、任務時のストレスをなるべく溜め込まないための配慮に基づいて、設けられた待遇なのだろうけれど、それは同じシンフォギアである聖遺物――《ガングニール》を纏う私の親友、立花響に対しても同様だった。

「うばぁーっ！　もぅ無理ぃ！　終わんないよぉ！　助けて未来ぅーっ！」

自身にあてがわれたワンルームほどの広さの自室スペースの真ん中で、私の親友の悲壮に満ちた悲鳴が轟く。

「はいはい、叫んでいる暇があったら、手を動かしてね」

「お、鬼だ!?　未来が鬼だぁ！　この世には絶望しかないんだぁ！」

この世の絶望を味あわされたような顔をする響。

私はそれには構わないで、自身で持ち込んできた週刊雑誌の、とりとめもないゴシップ記事に目を走らせていた。

どんなに恐ろしい敵にも決して屈せず、人類を守るために戦い抜いてきた歴戦の戦士であるはずの無敵のシンフォギア装者が、あっさり四肢を投げ出して降参のポーズだった。

「どうしてここは深海を突き進む潜水艦の中だというのに、〝コレ〟はどこまでもワタシを追いかけて来て逃がさないのでしょうか!? こんなのどんなノイズよりも怖いよぉ! カルマノイズ百体を相手にしてるほうが幸せだぁー!」

ワタシ呪われているーっ! と、なんだかいやに久しぶりに聞く口癖さえ口にしながら、完全降伏状態の親友は、自分がさっきまで向き合っていた机の上のモノを引っ繰り返した。

ページをめくる合間にそちらを見ると、そこにはそれなりの分厚さを誇る書類の束、表紙にはデカデカと『課題』の二文字。同じ学生の身分である私にとっても、なかなかゾッとしない光景である。

「そんなこと言ってたって、課題は終わらないよ」

「わぁーん」

私はため息を一つ吐いて、読んでいた雑誌のページを閉じる。床にぐったり寝そべる響の顔は不幸色で染まりきっていた。このまま放っておいたら暴走でもしそうな勢いだ。

ちらりと部屋に設置された時計を見ながら時刻を確認する。……まぁ、そろそろ休憩させてもいいくらいかな。そんな判断を下して、困った親友のお行儀の悪さには目を瞑ってあげることにする。

「仕方ないでしょ、ここ最近の《S・O・N・G・》の活動のせいで私も響も、満足にリディアンに通学さえ出来ていないんだから。こうして課題をするだけで、出席扱いにしてもらえるだけでも感謝しなくちゃ」

「うぅ……！　ワタシのせいじゃないぃ……ぜんぶ《ギャラルホルン》が悪いのにぃっ。平行世界の危機を救っているんだから、ワタシの学生生活の危機くらい大目に見てくれてもバチは当たらないんじゃないのでしょうか!?」

「はいはい、お馬鹿なこと言ってないで、あと五分休憩したら再開ね」

「うわーんっ！」

泣き声をあげながら、床をごろんごろんと転がっていく響。なんとも傍で見ていて心苦しい状態だが、こればかりはどうもしてあげることが出来ないので心の中で合掌してあげる。

「……ん？　そういえばさ、未来」
「んー？　なに？」
　さて雑誌の続きを読もうかと考えていたところに、ふとなにかを思いついたような、そんな響の声が掛かった。
『あっちの世界』のワタシって――ワタシとは真逆の性格だった、と雪音クリスさんが仰っておりましたね」
「仰っておりましたね」
　なによその口調。
「つまり、こっちの世界では勉強ダメダメな絶賛呪われブースト中のワタシでも、『あっちの世界』ではお勉強大好きデキる娘ちゃんだったり!?」
　驚きの事実を突きつけられたような顔をして衝撃を受けている響。友人のアレな思考回路に、軽く頭痛を覚えそうになる。彼女の残念っぷりが、なんだか年々酷くなってきているんじゃないかと、実は密かに心配な私だった。
　――あっちの世界。それは先日、私とクリス、そしてマリアさんの三人で調査に向かった《並行世界》のことを言っているのだろう。
　世界と世界をつなぐ聖遺物《ギャラルホルン》。詳しい原理や仕組みは、ただの学生である私には到底理解の及ばない域の現象だけれど、その作用によって、いま私と響のい

るこの世界と、〝別の可能性を持った〟並行世界が変則的に繋がるという異変に、現在の私たちは巻き込まれているのである。

それが最近、私たちが在籍する《私立リディアン音楽院》に登校できていないもっぱらな理由であり、響がいま大量の課題に追われている事態の遠因でもあった（ちなみに私の課題はすでに終了済みです）。

そして、それは前回の異変の話。

私は異変終息にあたって、〝別の世界〟の『立花響』と知り合うことになった。それには一言では語りつくせないほどの複雑な事情があってのことだったが、とにかくその、私が出逢ったその世界の響というのが、いま私の目の前にいる、私の小学校以来の親友――立花響とは大きく違う存在だったのである。

平行世界の立花響。別の世界の私の親友。

そのパラレルワールドで暮らしていた彼女は、想像を絶するような不幸な境遇に逢ったばかりか、それを支えて励ましてくれるような存在が、誰も傍に居なかったせいで、酷く他人を拒絶する性格の持ち主になっていたのだ。

世界を渡った私たち三人は、そんな彼女とたくさんの言葉を重ね、ときには衝突さえしながら、絶体絶命の苦境さえ乗り越えて、辛くも彼女を取り巻く環境を少しだけ変えることに成功した。あまりに膨大な不幸に押しつぶされて、自身の命すら危うくなって

しまっていた彼女を、運よく救い出すことが出来た。
平行世界の立花響。
今頃あの子は、一体なにをしているのだろうか。
「……そういえば、あっちの響とはそういう、なんでもない話までは出来なかったんだよね」
あっちに渡っていた頃は、いかにして自分の気持ちを彼女に伝えるかで頭がいっぱいだったから、そんなところにまでは気が回らなかった。
「ということは、ですよ!? いまからギャラルホルンを使って、あっちの世界の私を連れてくれれば、こんな課題くらいちょちょいのちょいでノイズよろしくぶっ飛ばしてくれるのでないのかなと!?」
「……ひびき? 知ってる? 現実逃避も、度が過ぎれば怒られるんだよ?」
「……ごめんなさい」
なんだか国民的ＳＦコミックに登場する、某猫型ロボットに泣きつくダメな子みたいな思考になっている親友を、笑顔で黙らせてあげる。私の笑顔が効いたのか、響はおびえた子犬のように自分の口を自らの手で塞いでいた（それはそれで失敬な）。
「それに……どうだろう? 響の残念な子っぷりは、どの平行世界でも共通って気もするんだけど」

「うええ？　ちょっと未来、それはいくらなんでも酷くない……？」
あっちの世界の響は、たとえ幼馴染としての贔屓目とお世辞を使っても、真面目に学校生活に勤しんでいるようには見えなかったし（実際、何度か学校をズル休みしていたようだ）、いま響の言ったような悪巧みは成功しないと思う。というかそもそも、そんな私用極まる理由で完全聖遺物を使ったら、Ｓ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．のみんなから大目玉をもらうのはまず間違いない。
最短で、最速で、真っ直ぐに、弦十郎さんからのお説教コース一直線である。
「ね。ね。未来っ、あっちの世界のワタシってさ、どんなだった？」
「んー？」
響が目を輝かせながら、そんなことを尋ねてくる。向こうの世界で私が経験したことは、すでに何度も彼女に訊かせてあげたはずなのだが、いまだに彼女の中では満足していないようだった。
まぁ、別世界の自分というのは、何度聞かされても興味の尽きない存在なのだろう。その気持ちは理解できなくもない。
「そうだねー、どこに行ってもやっぱり、響は響だったよ？　人助けが大好きな、どこかの誰かさんと同じお人好しさん」
まぁ、その誰かさんほど、おしゃべりじゃなかったけどね。

「ううーん、やっぱり何度訊かされても気になるなぁー！　一回くらい会って話してみたかったよっ！」
「ふふ、響があっちの響と？」
　好奇心にウズウズしている親友の様子がおかしくて、私は少しだけ噴き出す。
さぁ、もし実現していたらどうなっただろう？　あっちの響は、あんまり人付き合いの得意なタイプじゃなかったみたいだけれど。
「それでね、あっちのワタシに向こうの世界の、美味しいごはん屋さんを紹介してもらうんだ。なんたってワタシだよ？　これは超絶大期待が持てるってもんだよ！」
「えー、あっちでもごはんなのー？」
　なんとも響らしい考えだ。向こうの響が聞いたなら、さぞかし呆れて、憎まれ口の一つや二つ叩きそうな会話である。
「向こうの世界の未来とも、お喋りしてみたいしねー」
「……んー、それはどうだろう。あっちの世界の私は、響の傍に居ないみたいだったし。向こうの世界へ響が行ったとしても、会うのは難しいかもね」
「そんなことないよ」
「え？」
　響のほうを見る、

「ワタシの〝陽だまり〟は、どの世界のワタシにとっても〝陽だまり〟だもん。ワタシが本当に困ったとき、手を差し伸べて助けてくれる〝陽だまり〟は、たとえワタシがどんな暗い場所に居たって、必ず見つけ出して照らしてくれるよ」

そこにはにっこりと人懐っこい笑顔を浮かべている親友の姿があった。

「……響、もう、なぁにそれ」

……またお馬鹿なこと言ってる。私は雑誌のページを開くと、読むフリをして自分の顔を隠した。面と向かって恥ずかしがってるのを響に知られるのは、なんだか癪だ。

「だってワタシは、未来がいなかったらなーんにも出来ないダメな子だもーんねー？」

「……そんな調子の良いこと言っておだてたって、その課題は手伝ってあげないからね？」

「うぐぐ、勘付かれていましたか」

「もう」

いつもの心地いいやりとり。響は私のことを『陽だまり』だなんて言ってくれるけれど。私にとって響と過ごすこの穏やかな時間が、なによりも暖かい『太陽』と過ごす時間なのだった。

「それでね、それでね――およッ!?」

しかし、穏やかな時間というのはどの世界でも、そうそう長く続いてくれるものでは

ない。そんな風に響が楽しそうな想像を膨らませていた、そんなときだった。
私たちが居た響の自室を含めたＳ．Ｏ．Ｎ．Ｇ．本部内に、大音量の警告アラートが鳴り響いた。
数回の繰り返しの後、司令である弦十郎さんのものらしき声が入る。
『どうやらまたぞろ、ギャラルホルンが反応を示したようだ！　休んでいる中すまないが、シンフォギア装者のみんなは至急、司令室に集まってくれッ！』
「……課題の続きはあと、みたいだね」
「うぇえっ……仕方ないねっ。ちゃっちゃと平行世界の危機を救って、ワタシの危機に立ち向かわないとッ！」
私たちは軽く身なりを整えてから、急いで響の自室スペースから飛び出した。
ギャラルホルンが反応したということは、どうやらまた、どこかの平行世界とのゲートが開いてしまったということらしい。
気を引き締めながら司令室へ向かって駆け走る中、私は少しだけ、あの世界のことを思い出していた。
（あっちの響、元気にしてるかな……？）

◇　◇　◇

「立花の身の上は、先生も理解しているつもりだ。だけどな、少なからずあの事件でショックを受けたのは、なにも立花一人じゃないんだぞ――みんな辛いんだ。だから立花も一生懸命頑張らなきゃダメじゃないか。もっと前向きに考えてごらん？　いつまでも被害妄想に囚われていちゃあ、被害に逢われて亡くなられた方々に対して、申し訳ないだろう？」

人のシルエットをした真っ黒なナニカが、そんな言葉を吐いた。

男とも女とも判断のつかないような、そんな抑揚のない声。どこかで聞き覚えのある言葉だ。記憶を探ろうとして、思い出す。そうだ。これは当時の担任教師だった人から言われた言葉だった。

ロッカーに仕舞っていたはずの教科書がすべて、誰かに燃やされたり鋏で切り刻まれたりしていたせいで、ろくに使えなくなってしまっていたから、それを教師に申し出た際に言われた言葉。

「辛いのは立花だけじゃあ、ないんだ」

ワタシが巻き込まれた、あのライブ会場で起きた悲惨な特異災害事故――どうやらそ

こに、教師の恋人が居たらしいと、後になって知った。

「……響ちゃんがなにも悪くないってことは、ちゃんと理解しているわ。ちゃんと、わかってるの。でもね？　無理なのよ……貴方を憎まないと――憎みでもしないと、わたしはどうにかなっちゃいそうなの。だからごめんね？　本当に悪いと思ってる。ごめんなさい。だけどお願い、響ちゃん――あなたをこれからもずっと恨ませて欲しい」

今度は別のシルエットが、そんな言葉を吐いた。あぁ、これは覚えている。当時クラスが一緒で、いつもお昼ごはんや宿題を一緒にしていた、かなり仲の良かった女の子だ。

笑顔が良く似合う小柄な子で、事故の後で辛いことだらけだったワタシのそばで、ずっと笑顔を見せてくれていた子だった。

この言葉を言われたときだって――ワタシの教科書を鋏で切りつけながら、彼女は笑っていた。あの事故でお兄さんを亡くしていたのだと、誰から教えてもらったのだっけ。

「なぁぶっちゃけどんな感じなんだ？　みんなの税金で生きていける気分はさ？」

これは、となりの席の男子。

「可哀想だよねぇ立花って、あのとき死んどけばこんな思いしなくてよかったのにさぁ」

これは、一つ歳上の先輩。

「良かったよぉ元気になってくれて。でないとせっかくの特異被害援助金が勿体無いも

んねぇ」

これは……誰だっただろう。

たくさんの人型をしたシルエットたちが、ワタシに詰め寄ってきては、それぞれの言葉を投げかけてくる。

そのうちの一つがワタシの首を目掛けて、黒い手を伸ばしてきた。

「ごめんな響、もうお父さん限界なんだ。今日も得意先の人から、心無い罵声を浴びせられてさ……もう、これ以上は無理だ……耐えられない。だからさ、お父さんは――ここから逃げることにするよ」

ごめんな、と。その黒い影の手にグッと力が込められる。それだけであっさりとワタシの気道は塞がれて、呼吸が出来なくなった。

（……あぁ、苦しいなぁ）

ワタシは身じろぎ一つせずに、それを受け入れる。

「ごめんなぁ響……本当にすまない」

その手は謝罪を繰り返しながら、徐々に力を増していって――。

「――元気でな、響」

やがてワタシの意識はそこで、プッツリと途切れた。

「……っは、ぁ」

ワタシはそこでようやく目を覚ました。

視界に飛び込んでくるのは、見慣れた自室の天井。跳ねるように上体を起き上がらせると、体中から血が抜けていたような、嫌な喪失感に襲われた。ドクドクと痛いくらいに脈打っている自分の胸を押さえながら、それが落ち着くまでジッと耐える。

（いくら途中から夢だとわかっていても、〝あの頃〟の夢を見せられるのはちょっと……堪えるな……）

胸の動悸は簡単には治まってくれず、このまま心臓が止まってしまうんじゃないかと僅かな恐怖さえ覚えるほどだった。

大丈夫なハズなのに。もうあの暗く辛かった時期は過ぎ去ったハズなのに。穏やかな生活を取り戻したハズ、なのに。

（まるでそのなにもかもが――夢だったみたいで、苦しい）

起き抜けの頭はいつも以上に弱気で、ワタシの心を簡単に溶かしていく。

どちらが夢で、どちらが現実なのか。その境界線がとてもあやふやなものに感じられて、ひどく心細い気分になる。

ワタシは枕元に置きっぱなしにしていた、スマホの電源をつけた。そして起動させる

のは、アドレス帳のアプリ。
登録した番号なんてほとんど無いから、探すまでもなく目的の名前は見つかった。
『小日向　未来』
（よかった、ちゃんと在った――）
それは少し前、数年ぶりに再会した〝この世界の〟幼馴染の名前。ワタシを暗くて寒い暗闇から救ってくれた、陽だまりの名前。
自分がちゃんと、誰かに『手を繋いでもらった』という、なによりの証。
（だから――だいじょうぶ）
『――へいき、へっちゃら、だったでしょ？』

うん。そうだよ。こんなの、へいき、へっちゃらだ……。
スマホを握り締めながら、自分に言い聞かせるように何度も何度もその言葉を繰り返す。しばらくすると、まるで嘘のように胸の痛みは消え失せていった。嘘のように――夢のように。
あぁ、どこまで。あの子の存在は、ワタシのことを救ってくれるのか。
冷たかった自分の手が、まるで誰かに握ってもらえているように、暖かく熱を持って

いくような錯覚さえ覚える。うん、もう大丈夫。

その場で深呼吸をして、ワタシは今度こそ身体をベッドから起き上がらせると、自分がひどく汗をかいていることに気がついた。

（なんか……久しぶりだな。こんな風に悪夢に起こされるのは……）

少し風にでも当たろうと、ワタシは部屋に備え付けられたバルコニーへの扉を開いた。

本来、自分の通う私立リディアン音楽院の学校寮は、二人一組の相部屋という形をとって、部屋を支給されるシステムを採用している。つまりそれはワタシが住んでいるこの部屋にも、元々は一緒に暮らすルームメイトが存在していたということなのだが。

（……ワタシのことを怖がって、すぐ出ていっちゃったんだよね）

無理もないだろう。無断で外泊や、無断欠席は当たり前。早朝に帰ってきたと思えば、身体にはいくつもの傷を作っている。さっきのように悪夢でうなされて飛び起きたことも、一度や二度じゃない。もしルームメイトが出て行ってくれなければ、ワタシのほうが気を遣ってこの部屋を出て行っていたに違いない。

まぁ、その恩恵といえば悪いが（聞こえも悪ければ、その子にも悪い）、こうして部屋

を自由に独占し放題なので、深夜に明かりを点けて、バルコニーに出て涼んだりすることだって気兼ねなく出来る。自分が自由に使えるスペースというのは、いつどこで発生するかも分からないノイズとの戦闘に明け暮れているワタシにとっては、とても都合が良かった――いや。

「……もうワタシがノイズと戦うことはない、んだっけ」

夜風は火照った身体に心地よく、嫌な汗を引かせるにはピッタリだった。ようやく落ち着きを取り戻した頭は、冴えたように今の自分が直面している現実を受け止める。

自分の胸に刻まれた、傷跡。

かつてはその中に、人類が唯一ノイズと戦うことの出来る力――否、〝歌〟が在った。

そのおかげでワタシは自分の憎しみを、その元凶である《特異災害》ノイズにぶつけることが出来て――戦うことが出来た。それがどれだけ、ワタシの心を救ったことだろう。

暗い感情を吐き出す先があったことがワタシにとって、数少ない救いだったことは今となっては疑いようがない事実だ。たとえその矛先が、ワタシからすべてを奪い、不幸のどん底へ突き落としたノイズだったとしても。

もしこの歌が胸になければ、ワタシはとっくの昔に壊れてしまっていたかもしれないのだから。

しかし、その救いの歌は、同時にワタシの身体を蝕んでいく毒でもあった。
《融合症例》。ワタシの身体と同化した、撃槍《ガングニール》の欠片は、少しずつワタシを人間では無くしていたのだった。
ワタシを救っていた胸の歌は、歌えば歌うほど命を削っていく惨毒だったのだ。
やがて限界を迎えたワタシの身体は、ありえないほどの高熱を帯びて、世界を呪いながら朽ち果てる――ハズだった。
世界を渡ってワタシの前に現れた、〝彼女たち〟が居なければ。

『お願い……ワタシを、助けて……』
『うん、助けるよ。約束』

暗く寒い場所で、ずっと独りぼっちで戦っていたワタシを、暖かい光で照らしてくれた陽だまりのような彼女の輝きは、ワタシの心と共に、胸の毒さえも取り除いてくれたのだった。
すべてを救う、慈愛の光。
世界を渡ってきた幼馴染に、救われた今の私には、もう自分を護って戦うための胸の歌はないけれど――

（繋いだ手の温もりが――これからもワタシを護ってくれる）

そうだよね、未来？

◇

◇

◇

第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり　中

◇　◇　◇

表向きはただの学校教育施設として機能している私立リディアン音楽院だが、その所在地より、地下に向かって数千メートルほど下った先に、人知れず世界の脅威――特異災害ノイズと戦い続ける人類守護の砦、特異災害対策機動部の本拠地はある。

日本政府の秘密機関として、国民からはその活動のほとんどを隠匿されている機動部だが、その中でも、対ノイズ戦において実質的戦力を唯一保有している『機動部二課』に、その少女は身を置いていた。

すらりと伸びた体躯、凛々しく整った顔立ち。歩き方一つ取ってみても、一切の無駄のない彼女の所作からは、研ぎ澄まされた一本の日本刀のような雰囲気を帯びている。

少女の名は、風鳴翼。世間ではトップアーティストとして世界に名を通している彼女だったが、その実態は、二課が保有する対ノイズ戦の戦力『そのもの』であることを知っている者は、極僅かな人数に限られている。

「叔父様、ただいま日課とする鍛錬から帰参しました」
　二課にとっての中枢中の中枢。作戦の立案や実行をおこなう為の司令室へと足を踏み入れながら、翼のそんな報告を受けたのは、二メートルは悠に越しているだろう巨躯の持ち主だった。
「うむ、ご苦労だったな」
　『叔父様』と少女に親しげに呼びかけられ、快活に笑んで見せたその男は、翼の実の叔父であり、機動部二課の全権を任された総司令、風鳴弦十郎。
「ちょうどいいタイミングだ、翼。次のライブの打ち合わせへ行く前に、これから二課のミーティングに付き合ってくれ」
「はい、了解しました」
　歌手としての活動で多忙な日々を送る翼だが、たとえどれほど忙しくとも、彼女が人類守護の役目を怠たることはない。一も二もなく頷いたところで、今度は別の声があった。
「トレーニングおつかれさま～！　じゃあ翼ちゃんも揃ったところで、楽しいミーティングをはじめましょ～か？」
　声の主のほうを見て、少女は少し驚いたような表情を浮かべる。
「さ、櫻井女史!?　日本に戻っていらっしゃったのですか!?」

そこには眼鏡をかけた白衣を纏う妙齢の女性が居た。女性らしいシルエットを器用にしならせながら、演技なのか天然なのか妙に色っぽい調子で、こちらに微笑む彼女は――櫻井了子。

機動部二課が誇る、人類の脅威ノイズへ立ち向かう唯一の手立てを確立させた功労者にして、自他共に認める人類最賢の女性科学者である。

「ハーイ、ただいま翼ちゃん」

「たしか、櫻井女史は欧州の対ノイズ機関へ出向し、長期の極秘任務にあたっていると聞かされていましたが……？」

「うむ、ついさっき帰国してきたばかりでな」

「そうなのよ～、まったく。欧州はお堅い人たちばっかりで疲れちゃったわ～。しかも、任務内容は機動部二課じゃなくて、日本政府がわたしに対して直接の打診をしてきたものだから、《最重要国家機密（トップシークレット）》扱い。二課のみんなには話すことも出来ないし、満足に愚痴だって言えないのよ～？　こんなの酷いわ～」

頬を膨らませながら、拗ねたように語る了子。察するに相当大変な任務にあたっていたようだ。

『最重要国家機密』という不穏なワードも、あまり心中穏やかに聞き流すことが出来ない響きである。

司令である弦十郎なら、内密になにか聞かされているのかと叔父の顔色を伺った翼だったが、弦十郎はゆるくかぶりを振るのみだった。どうやら機動部二課の司令でさえも、その内容は秘匿されるものであるらしい。

ならばただの構成員である自分が追求したところで、了子が口を開くということもないだろう。そんな現実的な判断を下して、それ以上はなにも言及しないことにする翼。

それに無理に聞き出せば、今度は了子の身に危険が及ぶ可能性がある。機動部二課は日本政府直轄の機関だが、その政府が二課のことを『突起物』などと揶揄して、目の上の瘤よろしく煩わしがっているのは翼も自覚している事実だった。それに、心配だってしていない。

翼でさえ、その飄々とした振る舞いから真意を読み取ることの出来ない『お姉さん』、櫻井了子のことである。きっと二課の知らないところでも、上手く組織と渡りあっているに違いなかった。

「何を隠そうこのミーティング自体も、先日発生した《カルマノイズ事変》の件を、不在だった了子くんに報告するという意味合いを兼ねてのことだ」

カルマノイズ事変。弦十郎が放った単語に、少しだけ翼の表情が固くなる。

数週間前、突如として現れたノイズの大群と、それに混じって出現した特殊変異したノイズ――カルマノイズを巡って発生した騒動。それがカルマノイズ事変。

あまりに膨大な敵の物量差に、絶体絶命の窮地に追い込まれてしまった二課の面々、そして翼だったが、その危機を救ったのは、なんと並行世界から駆けつけた別のシンフォギア装者たちだったのだ。

平行世界を繋ぐ聖遺物の能力を使って、こちらの世界へ訪れたという彼女たちは、快く翼たち二課に力を貸してくれた。二つの世界の装者たちが、お互いに力を合わせることで辛くも、カルマノイズの撃退や、想定外に発生した完全聖遺物の暴走までを止めることが出来たのだが……。

「弦十郎くんから送ってもらった報告書は一通り読ませてもらってるから、ある程度の概要までは理解しているつもりなんだけど……まさか、わたしが留守にしていた間に、そんな大事件が起きていたなんてね……」

彼女には珍しい、沈んだような声を出した了子。たしかにあの窮地に彼女の姿があれば、かなり戦局を有利に戦うことが出来たのは言うまでもない。彼女の身としてはやはり、重要な場面に二課の仲間の助けになれなかった自分の境遇が悔しいのだろう。そんな風に彼女の胸中を推し量ってみた翼だったが。

「銀腕《アガートラーム》に魔弓《イチイバル》……それにわたしが発掘した《神獣鏡》の適合者ですって……？　あ～んッ！　平行時空のシンフォギア装者との邂逅劇だなんて、イチ科学者として、その奇跡を目の当たりに出来なかった自分の不幸が恨めしい

わ～ッ!!」

がくっと自分の柄にもなく、つんのめりそうになる翼だった。隣で弦十郎がわざとらしい咳払いをしている。

「ゴホン……了子くん。たしかに君らしい意見だが、事件の収束にあたって、我々もまったくの無傷だったというわけではないんだが」

「もちろん、そっちもわかってるつもりだわ――響ちゃんの《ガングニール》、ね？」

『！』

確信を突くような了子の言葉に、風鳴の名を背負う二人は表情を強張らせた。

そう。事変の収束こそ終えたものの、二課が受けた被害は決して軽いものではない。平行世界の装者たちと共に力を合わせた、こちらの世界のシンフォギア装者は、翼一人だけではなかったのだ。

立花響。こちら側の世界で、ノイズと戦うシンフォギア装者『だった』少女。

「いくら二課への協力を取り付けられなかった一般市民の身とはいえ、響ちゃんはあの奏ちゃんの意思を受け継いだ《撃槍》の持ち主。わたしたち機動部二課にとって欠けがえのないメンバーの一人であったことは間違いないわ。彼女の人命に忍び寄っていた危険に、イチ早く気付いてあげることが出来なかった責任は、シンフォギアを開発したわたしにこそある」

「……そんな、櫻井女史のせいでは」
《融合症例第一号》としての立花響。その稀有なケースに対応できなかったのは、なにも支援を行う二課の人間だけの責任ではない。戦場で顔を付き合わせる機会のあった、翼にもその責任の一端はあることだった。
聖遺物を胸に宿す少女の異常に、もっと早く気付けてさえいれば、彼女が胸の《歌》を無くしてしまうという結果にはならなかったかもしれない、と。翼は事変の後も、ずっと自問していたことだった。
「……了子くんの責任であると同時に、二課全体の責任ないし、その司令である俺にその責任はある。よって……我々にこれから出来ることがあるとすれば、それは精々《槍》を失くした彼女の予後を気遣ってやるくらいのものだろうよ」
弦十郎が、そんな風に話をまとめる。そこには弦十郎らしい、大人の覚悟が滲んでいる言葉であるように翼には感じられた。
「叔父様……」
「ま、なにはともあれ、だ」
一転して、声の調子を明るくして弦十郎。
「世界を渡ってきた彼女たちのチカラを借りて、一人の少女の尊い人命を救うことが出来たという事実は、何にも代えがたい功績さ。それに対して、翼は胸を張ればいい」

「い、いえそんな……胸を張るなんて」
姪っ子の頭に手を乗せて、弦十郎は快活に笑う。しばらく優しく撫でていたが、やがて険しい顔に戻ると。
「――しかし、だ。その奇跡の代償として、この世界でまた一人、ノイズに対抗し得る貴重な存在が欠けてしまったことは疑いようのない事実。翼、お前にはこれからさらに重い負担を強いてしまうことになるだろうが……」
悔しそうな感情の篭った言葉だった。翼はそれに顔を上げて、凛々しく応える。
「心得ております。もとよりこの身は、決して折れぬ防人の剣。たとえ最後の一刃となろうと、この身が刃を零すことなど有り得ません」
力強く。剣の答えには、少しの揺らぎもなかった。
「頼んだぞ、翼」
「お願いね、翼ちゃん」
「お任せくださいっ」
「よし、では引き続き、了子くんを含めたミーティングの続きを――」
弦十郎の言葉は、そこで強引に掻き消された。けたたましい警戒アラートが、本部内に轟いたのだ。
「――どうしたッ!!」

『市外近郊に、ノイズの出現パターンを検知ッ！　政府から出現要請がきていますッ！』
「あらあら、せっかく日本に帰ってきたのに、ゆっくりおしゃべりする暇もないみたいねぇ～」
　呆れた調子の了子の声を背中で聞いて、翼は司令室から飛び出した。
「――出撃しますッ！」
「無理はしてくれるなよ、翼ッ」
　返事をする暇さえも惜しんで、翼は地上へと繋がる直通エレベーターに飛び乗った。
　自分を包む浮遊感に身を任せているわずかな時間。翼は少しだけ、ここには居ない戦友のことを想うのだった。
　歌を失った、戦場の友のことを。
（立花……お前は一体いま、どこで何を見据えている……）

◇　◇　◇

「起きて、響。ねぇったら。もうそろそろ準備しなくちゃいけない時間でしょ？　はや

く起きようよ」

誰かの手で、身体を揺り起こされる感触。誰かがワタシの名前をずっと傍で呼びかけている。

今度は一体だれの台詞だろう。記憶を探ってみるが、こんなことをされたような記憶は出てこない。もう長い間会っていない母親だろうか？　それとも祖母だろうか？　リディアンに入学してから、すっかり生家とは疎遠になってしまっているから、もう長らく、誰かに起こされるということはされていない。

「せっかく朝ごはんも作ったのにぃ、響が起きてくれないとごはんが冷めちゃうじゃない」

朝ごはんか――それだって、最後に採ったのはいつだろう。思い出そうとしてみても、眠気の残った頭ではろくに判然としない。それにしても変な夢だ。なんだか食欲を掻き立てるような、いい匂いがするような気さえする。

それがなんだかとても――心地が良い。

（たまにはこんな良い夢も、見たっていいよね……）

「起きてよ！　ねぇったら！」

誰かの声は、懸命にワタシを覚醒させようと促しているみたいだけれど、もしワタシがこの夢から目を覚ましてしまえば、そこにはいつものように独りぼっちの寮の部屋が

広がるだけ。

それが嫌でも分かってしまっているから、ワタシは目を開けようとしない。いつまでもこの暖かい夢に浸かっていたい気分だった。

こんな穏やかな夢が見れるなら、ワタシはもう二度と目を醒めたくないと思えた。

「もぉう、響ィーッ!!」

「……ッ!?」

しかし、残酷にもその誰かはそれを許してはくれず、ワタシの耳元で叫び声を上げると、強引にワタシを目覚めさせた。悪夢を見たときとは違った意味で、飛び起きるワタシ。

覚醒したワタシの目が最初に映したのは当然のように――見慣れた自分の部屋の景色。

（……あぁ――酷い。穏やかな夢くらい、ゆっくり見せてくれたっていいじゃない）

夢の中の自分とは真逆に、最悪の気分を味わう。同時に込み上げてくるのは、寒気のような寂しさ。鼻の奥がツンとして、さっきまで見ていたあの夢の世界に、今すぐ逃げ戻りたい気分だった。

（たまには良い夢くらい――見させてよ）

「もう、やっと起きたね――響」

……え？

見慣れたはずの景色に――独りぼっちの景色の中に、まるでずっと初めから存在していたような自然さで、その少女は佇んでいた。

肩口くらいにまで伸びる、濡れたように綺麗な黒髪。透き通るように白い肌と、こちらを覗き込む優しい瞳。そして嬉しそうな微笑を浮かべる、暖かな表情。

「……み、く？」

「――ん、おはよ。響っ」

きちゃった、と。立花響の幼馴染、小日向未来の姿がそこには在った。

自分はたしかに昨晩、夢見が悪くて一度は起きてしまったものの、その後にきちんと同じ場所で就寝を果たしたはずなのだった。いつものように、というか当たり前のように一人で。ベッドに入って、眠りに落ちたはずなのである。

にもかかわらず翌日、目を覚ましてみれば、目の前には先日別れたはずの幼馴染の姿

があった。
　ありえない。ワタシはまだ、夢の中に居るのだろうか？
　そう思ってはみたが、それが紛れもない現実であることを立花響はすぐに実感することになった。驚いた拍子に、眠っていた二段ベッドの上から転げ落ちた衝撃によって。
「うわッ――ふっ、ぶぐッ!!」
　我ながら情けない声を上げて、床に後頭部をしたたかに打ちつける響。
「だ、だいじょうぶッ、響っ!?　怪我してないッ!?」
　慌てて駆け寄ってくる幼馴染に助け起こされながら、響は目の前の彼女が、本当に実在する人物であることが分かって、さらに目を白黒させた。
「え、え――な、んで未来がここに……ッ」
　床にぶつけた後頭部の痛みで、ただでさえ起きぬけで満足に働かない頭が、さらに重度の動作不良を起こしていたが、なんとか必死に疑問を口にすることに成功する。
「あ……え、えっとね――その」
　優しい手つきで、響がぶつけた患部を撫でながら、未来は少し面映そうに顔を赤らめている。
「――響に、会いたくて。おしかけちゃった」
「……」

あまりの事態に、言葉を失って固まる響。ぶつけた頭の痛みなど遥か彼方へすっ飛んでいった。

「あ、あれッ……響？　ねぇちょっと？　……響っ!?　響ィー!?」

すっかりフリーズし、呼びかけても反応しない響。

そんな彼女の様子を見て、どこか危険な部位をぶつけてしまったのかもしれないと勘違いをしてしまった未来が取り乱し、救急車を呼ぼうとするなど、二人が平静を取り戻すために、かなりの時間を要した。

どうにか落ち着いて、二人でテーブルにつきながら、未来が作ってくれたという朝食を口に運ぶ。

初めは朝ごはんを食べる習慣がないからと拒んでみたが、未来に涙目で悲しまれてしまったために、慌てて椅子に腰掛けた。

よく焼かれたトーストと、野菜がたっぷり入れられたスープ。一度口をつけてみれば、人間とは欲望には素直なもので、自然と手が動いてしまう。

自室で食事をしたのは、いつ以来だろうか。いつもは外で適当に済ませてしまうので、こうした光景はなんだか新鮮な気分だった。

否、新鮮に感じるのは、なにも食事をしている場所のせいではない。

誰かと――食事すること自体、もう随分としていなかったことなのだから。
「ど、どうかな……？」
「……ん」
未来が遠慮がちに感想を尋ねてきた。「美味しい」と素直に答えてあげたかったが、どこか気恥ずかしさを覚えてしまって、ついつい無愛想に答えてしまう。
せっかく幼馴染が作ってくれたのに。ワタシの口は重くて、自分の気持ちさえ満足に打ち明けることが出来ない。
口に出来ないならせめて、と。ワタシは精一杯の勇気を出して、未来に空になった自分のスープ皿を突き出した。
「……っ！　うんっ、待っててね。すぐおかわり入れてくるよっ！」
パァッと嬉しそうに顔を綻ばせて、スープ皿を受け取る彼女。そのままスープの鍋があるキッチンへ走っていった。
「……」
自分の傍に、誰かがいる風景。
たったそれだけのことなのに、見慣れたはずの自分の部屋は――独りぼっちの風景が、ひどく暖かいもののように感じてしまう。
胸に残るじんわりとした温もり。それが、未来の作ってくれた暖かいスープを飲んだ

せいなのか、それとも――。

くぅっと。ワタシのお腹がそこで、小さく音を鳴らした。

びくりと驚いてしまうワタシ。自分の顔に熱が集まっていくのがわかった。……み、未来に聞かれなくてよかった。

「おまたせ響っ、まだおかわりはたくさんあるからね」

少し間を置いた後。未来が湯気を出しているスープ皿を持ってくる。

「響がいっぱい食べられるように、たくさん作ったんだから」

そんなことを、言いながら。

「……そ、んなに、食べないし」

「えへへっ」

上機嫌に微笑んでいる幼馴染の顔をまともに見れず、ワタシはスープに口をつけるのだった。

久しぶりの朝ごはんの味は、とても暖かくて。どこまでも優しい味がした。

「予定よりだいぶ遅くなっちゃったけど、そろそろ学校へいこうか」

朝食をとり終えて、一息ついたのを見計らってか、未来がそんなことを言ってきた。じっとこちらの顔色を伺うような、控えめな眼差し。

「……」

ワタシはそれに、頷こうとはしなかった。何を口にするわけでもなく、彼女の目を見返す――嫌だったのだ。リディアンへ通学することが、ではなく、今日これから学校へ行くということが。

単純に、未来と離れ離れになるのが嫌だった。

盛岡で家族と共に暮らしているはずの未来が、せっかく遠路はるばる訪ねてきてくれたというのに、今から学校へ行ってしまえば、せっかく一緒に居られるはずの時間が減ってしまう。

それがたまらなく嫌だったのだ。

寂しがり屋の子供みたいな理屈だけれど、それがワタシの取り繕いようもない本心だった。それに今日くらい、学校を休んで未来と一緒に居たって、ワタシの生活になんの支障もないのだ。

今から学校へ向かったところで、始業時間には到底間に合いはしないだろう。今から急いで向かう理由も特にない。そもそもワタシは不定期だったノイズとの戦闘で、無断欠席や無断早退の常習犯である。勤勉に学業に勤しんだところで、なにを今更という話

だ。

しかし。

「――だめだよ、響。私がこうして響のそばに居る以上は、ちゃんと学校は行ってもらうんだから」

食後に淹れたコーヒーの入ったカップを持ちながら、未来は少し怒ったような口調でそう告げる。嗜めるような、そんな口調だ。

ワタシはそんな彼女を睨んだが、未来は意見を変えない。意地でもワタシを学校へ送り出そうとしているようだ。

こういうときの幼馴染が、誰よりも頑固であることをワタシは知っている。たとえ長い間ずっと離れて暮らしていたとしても、再会したのがつい最近のことだったとしても――それくらいは手に取るようにわかる。

ワタシの幼馴染である小日向未来という少女は、ワタシの知っている彼女のまま――別の世界の彼女と同じように、ワタシなんかを思いやってくれる、そんな優しい親友のままだったのだから。

「……どうしても行かなきゃ、ダメ？」

「ダメだよ。学校はズル休みするものじゃありません」

教師のような諭し方で、ワタシの支度を急かす。教えてもいないはずなのに、いつの

間に出してきたのか、ワタシのリディアンの制服を持ってきた。
「……わかった」
「はい、えらいえらい」
不承不承に頷くと、にっこりと笑顔を浮かべる未来。ワタシは不貞腐れて、彼女の手から引っ手繰るように制服を受け取る。
「……じゃ、着替えてくるから」
「あ、ちょっと待って響。私も着替えるから」
ワタシを引き止めて、未来。
「？」
なんだろう。これから未来も、どこかへ出掛けに行く用事でもあるのだろうか。もしかしたらその用事をするついでに、ワタシに逢いにきてくれたのかもしれない。
「もぉ、違うよ」
おかしそうに少し噴き出してから、未来はワタシの手を握って、とびきりの笑顔で言うのだった。
「私もリディアンへ行くから、一緒に行こう」

◇

◇

◇

第一章　繋ぎ合った、あの手の温もり　下

◇　◇　◇

小日向未来。数年越しに再会を果たした、ワタシの一番の親友。

数日前。数多のノイズとの戦いの末、自分の命さえ投げやりに燃やし尽くそうとしていたワタシの手を握ってくれたのは、別の世界の〝彼女〟の手だったけれど、それでも『小日向未来』という少女はどの世界に居ても、自分の幼馴染の為なら世界の壁すら越えてしまえるような、ワタシにとって『陽だまり』の存在であることに違いがなかった。

それは彼女――ワタシの危機を聞いて、わざわざ駆けつけてくれたこの世界の未来も、同じであったようで。

彼女はなんと、ワタシと再会をしたあの日。あの後、盛岡で一緒に暮らしていたという両親を強引に説得をして、こっちへ――私立リディアン音楽院への転校を申し出ていたのだという。

もちろん、普通では考えられないような無謀過ぎる思いつき。家族の説得や、転入試

験に引越しの準備など、どう贔屓目に考えてみたところで、とても現実的ではないような考えだった。それなのにも関わらず――驚いたことにワタシの幼馴染は、その願望を現実のものにしてしまったらしい。

今日、こうして未来がワタシの寮室を訪ねてきたのは、転入届けを学院側に提出するためだったのだそうだ。

「明後日くらいには、一緒に学校へ通えるようになると思う」

楽しみだなぁ、と。嬉しそうに顔を綻ばせて、未来。

彼女が語って聞かせたあまりの急展開に、すぐには理解が追いつかないワタシだったけれど、その中でもとりわけ動揺してしまったのが、未来が既に決めていたというその引越し先だった。

「相部屋だった子にも声を掛けてみたら、別にかまわないよって言ってもらえたから」

明後日からは、一緒に暮らそうね響。

動揺というより、もはや仰天だった。

そう、未来が引っ越してくるのは、他でもないワタシの部屋だというのである。

リディアンの学校寮は通常、二人組の生徒に一部屋を与えられるシステムだ。ワタシ

のように一部屋を一人で独占している環境は、本来ではありえない。それを、どうやって探し出したのか、未来は部屋を出て行ったはずのワタシの元ルームメイトと話までつけて、合鍵をもらったのだという。

朝起きたら未来がすぐ傍に居た事に、これで図らずも納得がいってしまうワタシだった。

「な、なんて無茶苦茶な……」

一連の事情を聞かされて、やっとのことでワタシの口から、呆れたような声が零れる。

「あ……ご、ごめんね響。勝手に決めちゃって……もしかして、迷惑だったかな」

「……」

そんなことない、と。すぐに返事をしそうになったが、戸惑い通しのワタシの口は、うまく動いてくれなかった。

未来との共同生活——陽だまりのそばで居られる、そんな生活。

そのヴィジョンはあまりに幸せ過ぎて——輝きすぎていて。

降って沸いてきたような、そんな幸せが、独りぼっちでもがき続けることが日常になっているワタシには、相応しくない気がして。

ワタシは思わず、下を向いてしまうのだった。

「……ひびき」

そんなワタシの様子を見て、未来がそっとワタシの手に触れる。
さっきもこんな風に手を握ってもらったけれど、そのときよりも優しく、彼女はワタシの手を包み込むように握り締めた。
「……私ね、響に逢いに行くまで、それまで響がどんな生活をしていたのか、どんなに苦しみながら戦っていたのか、ぜんぜん知らなかったんだ」
「……みく」
「響が一番ツラいとき、私は響のそばに居てあげることが出来なかった。私はそれが、その事実がとても悔しい。そんな自分が許せない」
「そ、そんなこと――ッ」
ないっ、思わず言い返そうとしたが、未来はそんなワタシを静かに制して、言葉を続ける。
「ううん。私ね……一番の親友が苦しんでいたのに、それに気付いてあげることが出来なかったんだよ？　響に……酷いことをしてしまった。今さら許してもらおうなんて、思っていない――それでも。私は響と、貴女とこれからも一緒に居たいんだ」
これは私のわがまま。調子の良い話かもしれないけど、そうじゃないと私は、立花響の一番の親友として、胸を張れない。
未来の手に力が篭もる。そこから伝わってくるのは、暖かな彼女の体温だけじゃな

い。まるで彼女の気持ちが、繋いだ手を通してワタシの中に流れ込んでくるようだった。

「どう思われようと関係ない……もう響が一人で背負い込んで、独りぼっちで苦しむだなんて耐えられない……響さえよかったら、これから貴女のそばに、私も一緒に居させてほしい」

未来はそう言って、ワタシの目を真正面からに見据える。

あぁ、なんてこの手は――。

別の世界の未来に手を握ってもらったあの時と同じ、穏やかな気持ちがワタシの中に流れ込んでいく。

そうか。これが――これこそが、ワタシがずっと求めてやまなかったモノ。ワタシの――、

「……やっぱり、〝陽だまり〟だ」

「え……？」

「……別の世界の、未来が言ってたんだ。自分は〝立花響の陽だまり〟なんだって」

ワタシの言葉に、未来はきょとんとした顔になる。大きな瞼を何度か瞬かせた後、や

がて彼女はおかしそうに破顔すると。
「ふふっ、なぁにそれ」
と笑った。
「……あ、はは」
つられて、ワタシも笑う――笑った。

なんだか本当に、随分と久しぶりにワタシは。
自分らしく、笑えた気がした。

「響、遅れちゃったけど――ただいま」
「……ホントだよ。遅刻だからね、未来――おかえりなさい」

◇　◇　◇

「ごめんね響。まだちょっと書類の提出や、入学の手続きがあるらしくて……。さきに

寮に戻っておいてもらえるかな？　晩御飯は一緒に食べようね」

これは未来の台詞。

派手な遅刻をしたけれど、それはいつものことで特に気にも留められていないのか、教師から怪しまれるといったことも特に無く、無事に午後からの授業を受け終わったワタシが、学院内の事務課で手続きをしていた彼女と合流した際、そんな言葉を掛けられた。

別に急いで帰宅するような用事も無いので、待っていようかと申し出てみたが、未来には「悪いから」と丁重に断られてしまった。

無理に待って、彼女にいらない気を遣わせてしまうのも悪いと判断してワタシは、言われた通り素直に帰路へつく。

誰かの帰りを待つ。

そんなこと、もう随分としていなかったことなので、なんだか気持ちがふわふわと落ち着かない気分だった。

意味も無く、商店が立ち並ぶ人通りの多い道を選んで、寮のある方面へと歩く。真っ直ぐ家に帰ると、とても穏やかにはいられないような気がしたからである。

（なにか、未来に買って帰ろうかな……）

お店のウィンドウをぼんやりと視界に留めながら、そんなことをふと考えてみたけれ

ど、そこでワタシは、彼女の喜びそうな品に心当たりがないことに気が付く。
（もう何年も会ってなかったんだから、知らないで当然……だよね）
年月が開けてしまった、ワタシと彼女との距離。それが少しだけ、空しさを感じさせて。ワタシは寮へと向かう足取りを、少しだけ遅らせる。
（未来の好きなものって……なんだろう。小学生の頃は、カキ氷とか好きだったけど……）
食べ物の好みは、まだ高校生になっても変わっていないのだろうか。さすがに何年も過ぎれば、彼女の味覚も変化していてもなんらおかしくはない。それにたとえ変わっていなかったとしても、カキ氷は少し、お土産としてはチョイスしにくい品物である。
それに贈り物といえば食べ物、と安易に考えてしまっては、未来に呆れられてしまうかもしれない。久しぶりに再会した幼馴染に、食い意地が張ったヤツだと思われてはたまらない。
（未来に聞いてみたいことが……いっぱいある……）
一体、なにが好きなんだろう。どんなものが嫌いで、どんなものに興味を持つような女の子になっているのだろう。
たくさん聞きたい。もっとたくさん知りたい。そう思って、ふと気が付いた。
「……そっか、ワタシ」

二人の間にできた空白。年月が開けてしまったその距離を自然と取り戻そうとしている、そんな自分に。そのことがとても、嬉しくてたまらないと感じてしまっている自分に。

「……はやく、会いたいな未来」

さきほど会ったばかりだというのに。なんだかおかしくて、ワタシは家に向かう足取りを早めようとした。

そのときだった――。

「ッ!?」

街中に轟く爆音のアラート。ビリビリと衝撃さえ伝わってくるかのようなその音に、ワタシの近くを歩いていた通行人たちが悲鳴をあげる。

「ノ、ノイズ警報だッ」

「嘘だろッ、昨日もあったんじゃねぇのかッ!?」

半ばパニック状態になりながら、逃げ惑い始める人々。瞬く間に平穏な風景は、悲鳴と怒声の混じった喧騒へと塗りつぶされていった。

洪水のような勢いで、避難していく人々の流れの中。ワタシはノイズ警報が垂れ流しにされている方向を睨み付けた。

（ノイズが……ッ！）

どうする。以前の自分なら、一も二もなく駆け出している状況。
すぐにでも警報が発生している場所へ、ノイズを殲滅しに向かう場面。
しかしそれは。自分の身体の中にノイズと戦う術が――胸の歌が、在ったから。
（今のワタシには、胸のガングニールはない……行ったところで、ワタシにはなにも出来ない）
ノイズと戦えないワタシが行っても――。
そんなことを考えて立ち尽くしていた、そのとき。
「だ、誰かっ、わたしの娘を知りませんかっ!?　あ、あのっ！　誰かっ！」
ワタシの耳に、一人の女性の悲鳴が聴こえてきた。
「……ッ!?」
声のする方を見ると、そこには顔を真っ青にしながら取り乱している女性の姿。彼女は必死の形相で、すれ違っていく人々に縋りついている。
悲鳴の内容から察するに、どうやら避難しようにも運悪く、自分の娘と離れてしまっていたらしい。
（ノイズと戦えないワタシ……行ってもなにも出来ないワタシ……）
たとえ――そうだとしてもッ。
考えるより早く、ワタシは女性が居るほうへ駆け出していた。

「……そのはぐれちゃった子の、特徴を教えてッ！」

◇　◇　◇

母親から教えられた特徴をした、少さな女の子を、けたたましくサイレンが鳴り続ける中で、響が発見できたのは幸運以外の何物でもなかった。

（――っ！　居たっ！）

少女が蹲っていた場所へと駆け付けて、響は呼吸を落ち着ける。

それと同時にざっと辺りの建物を見まわしたが、大きく損壊している場所は見つからない。どうやらまだ、この辺りの区画まではノイズは押し寄せて来ていないらしい。それを確認し、響は静かに胸を撫で下ろす。

「お母さんがいないのぉっ、お母さんが――」

母親とはぐれたショックと、災害時の独特な空気感に呑まれてか、泣き続けることし

か出来ない少女。年端もいかない彼女の低い身長に合わせて、響はその場でしゃがみ込むと、少女に視線を合わせた。

「……だいじょうぶ。お母さんの居るところ、お姉ちゃんが知ってるから。だから、お姉ちゃんと一緒に行こ」

ね？　と、穏やかな声音を使って話し掛けると、少女はしゃくりあげるような泣き声を上げながら、たしかに一度頷いた。

少女の身体を背負い込み、重心をやや前方に傾けながら、その場で立ち上がる響。彼女が、近くの避難シェルターの位置取りを思い出そうとした、ちょうどそのとき。

「――ッ!!」

腹の底に響くような轟音と強烈な振動を立てながら、すぐ目の前にあった建物が崩壊した。

「……クソッ！」

一瞬のうちに、瓦礫へと変貌していく風景。響はその中――朦々と立ち上がる砂埃の中に、たしかにこちらを見据えながら、飛び込んでくる影を見た。

慌ててその場で、少女を抱えたまま横へ飛び退く。すると、さっきまで響が居たその場所を、流動するナニカが凄まじい速度で通り過ぎていった。

ソレは直線上にあった街路樹へと衝突し、ようやく動きを止める。肌がチリチリする

ような、独特な感覚。響の首筋を、うすら寒い嫌悪感が撫でていった。
「っ」
人間を炭化させ、瞬く間に分解してしまう超常特異災害――人類はその未知の異敵を《ノイズ》と呼んでいる。
少女を背負い直すと、響はすぐさま踵を返して、ノイズが現れた方とは逆方向へと駆け出した。
「……こわいよ、おね……ちゃ、ん」
背中越しに聞こえてくるのは、恐怖に震えて今にも消え入りそうな少女の泣き声。
「――だいじょうぶ」
冷や汗を額に浮かべながら。全力疾走する足は一切緩めず、響は気丈に振舞ってみせる。瓦礫へ変わっていく街を駆け抜けながら、立花響はそれでも、弱い者へと懸命に語りかけた。
「こんなの、へいきへっちゃら――だから」
生きるのを、諦めないで。と。
立花響は、走り続けた。

後方から聞こえてくる破壊音にまるで追い立てられているかのように、無人になった街道を走り続けて、どのくらいの時間が経過したか。

いくら自分の年齢の半分もしないような子供とはいえ、人一人を背負っての全力疾走をいつまでも続けることは、たとえ装者としていくつもの戦場を強靭にくぐり抜けてきた響であっても、不可能だった。

それどころか、シンフォギアとしての力を振るえない今の自分は、同世代の人間のフィジカルとそう大して違いがない。

走るスピードはみるみる落ちて、足取りにも少しずつもつれが生じ始める。自分のスタミナに限界を感じ始めた、そのときだった。

「……ッ!?」

数十メートル先。自分の進行方向に続いていたはずの道路が、大きく歪んで崩落してしまっているのに気が付いた。どう見繕ってみても、飛び越えられるような規模のものではない。

それならば、別の道を――。慌てて方向変換をしようと考えるが、道が崩落するほどの破壊を受けた街で、無事に通り抜けられそうな他のルートなど、タイミングよく存在しているはずもなかった。

進路を絶たれ、別の逃げ道もない。チラリと振り返ってみれば、後方からコチラを目

掛けて走り寄ってくる影がいくつも見える。
（どうする――イチかバチか飛び降りるか!?　ダメっ。それじゃあこの子が無事で居られるかわからないっ。でもこのままじゃいずれ――どうするッ）
目まぐるしく脳みそが回転して、この場を無事に生還する術を探し出そうとするが、都合の良い解決方法は見つからない。
動揺と焦りばかりが募って、余裕が無くなっていく自分の頭にはやがて、
（今のワタシに――ガングニールの歌が、在れば）
そんな、考えても仕方のないことまで過ぎっていった。
「おねぇちゃん……わたしたち、しんじゃうの？」
背負った少女から、そんな弱々しい問いかけが投げられる。
「！」
追いかけてきていたノイズが、もうすぐそこにまで迫ってきているのがわかった。前には崩れた道が、ぽっかりと大穴を開けている。
絶体絶命の窮地――にもかかわらず。
「……さっきも、言ったでしょ」
立花響はそれでも、顔を俯かせることだけはしなかった。
「生きるのを、諦めるなぁッ!!」

吼えるように叫んだ後、響は余力のありったけを振り絞って後ろへ――ノイズの群れが迫っている方向へと、駆け出した。

ノイズが迫ってきている中での、正面突破。常人ならば、気が狂ったとしか思えない異常な選択だったが、それを選んだ響の思考は、決して捨て鉢によるものではない。

普通の人間なら、ノイズという絶対の危機を前にして、まともに動くことなんて到底出来ない。しかし、もし――対ノイズ戦闘に熟練した者が居たとすれば？

先頭を走っていた一体が、身体を流動的に変形させて飛びついてくる。先端が少しでも触れれば、あっけなく人体は炭へと変わってしまう、そんな一撃必殺の恐怖。

響はそれを、わずかなサイドステップのみで避ける。

たとえシンフォギアを纏えずとも。

夥しく蓄積されたノイズとの戦闘の数々は、立花響の身体の中にたしかな経験として、きちんと根付いていた。

研ぎ澄まされたその経験が、彼女にノイズの間合いを正確に伝えていく。

「ッ、ふっ――っ」

右へ、左へ。身体を翻しながら、ノイズからの必殺の一撃を辛うじてのタイミングで、かわし続ける。

（これなら、もしかしたら――ッ）

押し寄せてくるノイズからの攻撃をかわしながら、がむしゃらに前へと足を踏み出す。ピンと細く張られた綱を、危ういバランスで進み続けるような、そんな離れ業。

やがてそんな決死の綱渡りは、一縷の希望がわずかに垣間見えたところで――

「あ――」

綱そのものが、プツンと音を立てて引き千切れた。

瓦礫の一部かなにかに足を引っ掛けたのか、ぐらりと体幹が崩れる。少女が離されないように両手で彼女を支えていたため、響は受身も取れずにアスファルトの路面に顔を打ち付けてしまう。

（まずい――これじゃ、あ）

慌てて身体を起こそうとするが、そこにノイズの一体が、こちらを目掛けて既に飛びついてきているのが見えた。

世界がスローモーションのように、緩慢な動きを見せる。

身体を変形させて、命を刈り取る楔のように、こちらに飛び込んできているノイズ。

響の中の経験が、このままでは確実に自らに死が訪れることを告げていた。

今から回避したところで、わずかに間に合わない。それまでに致命的な間合い。

否。

もし背中のモノを捨てて、自分の身一つで飛び去れば、もしかしたら。

（――っ）

そんな選択肢がわずかに頭を掠めていったが、それが意味する結果を、立花響は――立花響という少女は。

許せるはずが、ないのであった。

「……うぁあああああアッッ!!」

繋いだ手を離さずに。立花響は最期のそのときが訪れるまで、懸命に抗い続けていた。

そのときは、いつまで待っても訪れなかった。

痛みもなければ、身体が炭へと変わり崩れていくような奇妙な感覚もない。それとも案外、死ぬときというのはこんなものなのだろうか。

もしかしたら既に、自分の身体はおろか、痛みを感じる感覚さえも、真っ黒な炭に変わり果てているのかもしれない。

いや、だとしたら――変だ。もし炭になってしまったのなら、今こうして思考が出来

ている自分はいったい――？

「……？」

響が、おそるおそる目を開けてみると、そこには。

小さな少女を背負って、腰を抜かしているのか、地面に倒れこんでいる自分と同世代らしい女子の姿があった。髪はボサボサで、気の抜けたような間抜けな表情をしている。否、ちがう。これは――自分だ。

そこには、自分の姿があったのだ。まるで鏡に映ったように、そこへ映り込んでいた自分の虚像と、視線が合う。

そこには、さっきまでノイズが飛びかかって来ていたハズで、まるでその鏡はワタシをノイズから護ってくれているかのように、そこに――。

「……鏡？」

「――違う。剣さ」

応えは、頭上から降ってきた。

◇　◇　◇

ノイズ出現の報を受け、二課本部から発つヘリに乗って現場へと駆けつけた私は、上空からノイズに追われ、走り回っている見覚えのある顔を見つけた。
「立花っ！」
迷いなくヘリから飛び降りると、自由落下をしながら、上空で胸の中の聖詠を解き放つ。
――Ｉｍｙｕｔｅｕｓ　ａｍｅｎｏｈａｂａｋｉｒｉ　ｔｒｏｎ．
光が自分の身体を包み込んで、絶刀を身に纏う。
私は空中で体勢を整えると、腰から抜き放った白刃を大剣へと変化させて、落下の勢いを殺さずに、そのままの衝撃で地面へ突き立てたのだった。
「……鏡？」
「違う、剣さ」

見下ろすと、その場に座り込む戦友の姿。そして彼女の背中に、どうやら巻き込まれた民間人と思しき少女が背負われていることに気が付いて。

（たとえ戦う術を喪っても――お前は、誰かを守ろうと戦っているのだな）

変わらない、立花響という一人の戦士の生き様。彼女と言葉を交わす機会は、それほど多くあったわけではないけれど。

わずかに自分の口元が緩むのが、自分でもわかった。

ならば、私は――。

（誰かを守ろうとするお前を、護ってみせるとしよう――）

それが防人として、お前の隣に肩を並べていた私の使命だ。

私は腰から剣を一振り抜き放つと、支柱にしていた大剣から飛び降りた。立花が座り込んでいた方とは別の――ノイズの群れがいる方へ。

そこからは、一瞬だった。

斬りつけて、斬り伏せて。

振りぬくたびに風鳴る防人の剣が、群れをなして押し寄せていたノイズをすべて灰燼と帰すのに、さして時間はかからなかった。

やがて。

『……辺り一帯のノイズ反応、完全に消滅しましたっ』
最後の一体。頭部に切っ先を突き立てて灰に還すと、ヘッドギアから本部にいる藤尭オペレーターらしき声で、そんな報告が挙げられた。
『ご苦労だった、翼』
少し間を置いて、私を労う叔父様の声も入る。
「……叔父様、現場に立花の姿があります」
『なに!?　それは本当か!?』
「ええ。ですから今から、彼女と共に本部へ――」
そう言いながら、私が振り向くと、
「……なっ」
そこにはすでに、立花の姿は消失していた。
代わりに彼女が背負っていた、年端もない幼い少女が一人で、怯えたようにこちらを見ながら立ちすくんでいる。
「お、おねぇちゃんが、『後はあの人についていけば大丈夫だ』って……っ」
慌てて辺りを見渡したが、すでに近くには居ないらしく、立花らしき影は見当たらない。どうやら私が現れてすぐに、この場を立ち去ってしまっていたようだ。
かくかくと膝を震わせながら、目元に大粒の涙を溜めている少女。さきほどまでノイ

ズに囲まれていたのだ、無理もない。

「……わかったわ。心配いらない。私の後に、ついてきてくれるかしら？」

纏っていたシンフォギアを解き、私はその場にしゃがみこんで、少女へと語りかけた。

彼女の目が、生身になった私を映す。

『……翼、仕方ないさ。その少女を安全な場所まで送り届けて、本部に戻ってこい』

「……不承不承ながら、了承しました」

通信の声に返事をして、私は少女に近付くと、その手を握って歩き出すのだった。

（まったく……せめて別れの言葉くらい、交わしてくれても良いものだろうに）

炭の舞う暗い空を眺めながら、私はこの場から消えた彼女の背中を想いながら、一人ごちるのだった。

第二章　雲滲む陽射と、差し込んだ光明　上

◇　◇　◇

リディアンからの帰り道。特異災害《ノイズ》の発生。

絶体絶命に瀕したワタシのことを救ってくれたのは、特異災害機動部二課所属の装者、翼さんだった。もしも彼女が、シンフォギアを纏い、ワタシたちのもとに駆けつけてくれていなかったら――今ごろ自分は、この世には居なかっただろう。

しかし。

ワタシはそんな彼女の背中を――最後まで見届けることはしなかったのだった。

助けてもらった礼を言わなければいけないのはわかっていたけれど、どうして耐え切れなくなってしまって、気が付けばワタシは逃げるようにその場を後にしていた。

（いまさらワタシに、あの人と交わせる言葉なんて――なにもないから）

『誰かに護られる』という経験。それがなんだか、とても居心地が悪いものであるように思えて。

ガングニールを纏っていたあの頃――彼女とは決して良好とはいえない、ほとんど敵

対していると言っていいような険悪な関係を築いていたワタシだったけど、そんな相手でさえも、翼さんは身体を張って救ってくれた。

ううん、救ってもらえたのは、別にこれが初めてじゃない。

別の世界から渡ってきた未来に、手を取ってもらったあのときでさえも――翼さんは、どうしようもないほどにワタシを手助けしてくれていた。

敵対していた人間でさえも、全身全霊を懸けて救おうとする、あの人の装者としての在り方。

『防人』の生き様を自らに課しているあの人は、どこまでも真っ直ぐで――そして、格好よかった。

だからこそ――ワタシはそんな翼さんに、申し訳なくなってしまったのである。

誰かを護って剣を握る彼女を見て、ただ護られているだけの自分が、なにも出来ない無力な自分が、どうしようもなく情けなくなってしまって、顔を合わせることが出来なかった。

救出した女の子をその場に残して、フラフラとした足取りでその場を離れると、それからどこへ寄り道するということもなく、まっすぐ寮へと帰ったのだった。

寮に帰ってからしばらく間を置いて、未来が帰ってきた。

「今さっき、そこでノイズ警報があったって……っ！　大丈夫だったの響っ!?　怪我とかしてないよねッ!?」
　物凄い勢いで問い詰めってきた未来に、ワタシは少し呆気に取られる。
「……大丈夫だから。未来こそ、平気だったの？」
「う、うん。ノイズは二課の人たちが対処してくれたみたいで、すぐに収まったみたいだから……」
「そう――なんだ」
　自分がその場に居合わせていたということは、未来には話さなかった。
　せっかく遠方から会いにきてくれた親友に、余計な心配をかけるのは嫌だったし、正直に話せば「どうしてそんな危ないことをしたの」と、怒られてしまうことが目に見えてわかっていたからだ。
　誰に文句や嫌味を言われたって、今さら気になんてならないけれど、未来に怒られるのはなんとなく嫌だった。
「なんだか最近、ノイズの発生が頻繁になってるって聞いたよ……？」
「……うん」
　よく見れば、どうやら未来は走って帰ってきたらしく、彼女の肩がわずかに上下しているのがわかった。

彼女の心配そうな声。
心配――してくれたんだ……。
「お願いだから、無茶しないでね、響……」
「……うん」
こっちがなにも言わなくたって、ワタシの身を真っ先に案じてくれる親友の存在。ワタシはそんな彼女からの問いかけに、頷くことしか出来なかったのだった。

翌日、ワタシはリディアンを休んだ。
昨日、未来から釘を刺されたばかりだというのに、一日だって言いつけを守れないのかと我ながら落ち込みそうになったが、どうしても今日は、学校へ行く気分になんかならなかった。
幸い、今日はワタシの隣に幼馴染の姿はない。
彼女は昨日の夜、ワタシと夕食を取った後すぐ、一度引っ越しの準備をするために盛岡にある実家へと戻っていったのだった。
「本当は正式に入学する日にこっちへ来る予定だったんだけど、少しでも早く響の顔が見たかったから……」

明日の朝には戻ってくるからね、と残念そうに言い残して、彼女は帰っていった。
つまり今日は、ワタシ一人。
未来と一緒に生活を始めたら、こんな風に学校をズル休みすることも許してもらえないと思うので、つまり今日は実質最後の、気ままな独り暮らし生活だというわけだった。
（……まぁ、学校をサボったところで、別にしたいことなんてなにもないわけなんだけど）
あてもなく、街の景色をぼんやり眺めながら歩く。
昨日、ノイズが出現した場所へにでも行ってみようかとも考えたが、途中で通行止めになっていた。
当然かと諦めて、なんとなく足の向くままに歩き続けてみる。
ぼんやりと思い出すのは、もちろん昨日のこと。
（――結局、ワタシはなにも出来なかったな）
誰かを守って戦うことも、守るために逃げることも。なにひとつ満足に、成し遂げることが出来なかった。
それどころか、守らなきゃいけない命を危険に晒して――
もしも翼さんが助けにきてくれなかったら――そう思うと、いまさらになって嫌な悪寒が自分の背中を撫で付けていく。

歩くワタシと、まばらにすれ違っていく人々の姿。ノイズと戦う術をもたない、ただの普通の人たち。

『この人』たちと同じようにワタシも――護られる側になったのだと、そう自覚してしまう。

誰かを護る側ではなく、誰かに護られる側へ。

それはもう――あんなに恐ろしい戦いに、自ら飛び込んでいかなくても良くなったということ。独りぼっちでがむしゃらに戦い続けなくても、良くなったということ。

もうこれ以上、痛い思いをしなくてすむ。苦しい思いをしなくてすむ――それはとても、幸せなことであるハズのことなのに。

救われたということ――であるハズなのに。

（……なんで、歌えなくなってしまったことがこんなにも〝辛い〟んだろう）

近くにあったショーウィンドウに映り込んだ自分の表情は、救われた人間が浮べるべき晴々しいソレとは、遠くかけ離れたものだった。

……だめ、こんなこと考えても仕方ない。

思い直して、ワタシは映り込んだ自分の顔から目を離す。
もうこれからワタシの傍には未来が――〝陽だまり〟が居てくれるんだ。だから、こんな顔をしていちゃ彼女に嫌われてしまう。
早く慣れなきゃいけないんだ――自分の、この気持ちに。
こんなの、へいき、へっちゃらだ……。

そんな風に、まるで自分に言い聞かせるように心の中で呟いていた、そんなときだった。
――ブルルンッ。と。
大きなエンジン音が一回、ワタシの耳に届いてきた。それは、若者がエンジンを意味も無くカラ吹かししている様な、そんな耳障りな音などではなく、まるで誰かに合図しているような――そんな音だった。
反射的に、音がした方を見る。すると、そこには。

「こんなところで――奇遇だな。息災だったか、立花？」

ブルーのライダースーツを着込み、ヘルメットのバイザーを上げてこちらに微笑む、すらりと研ぎ澄まされた日本刀のような少女がバイクに跨って佇んでいた。

◇　◇　◇

嘘かまことか国内のみならず、その熱狂的な人気は海外にまで轟き渡っているという、現役トップアーティスト――風鳴翼。

そんな彼女の周りには常に、黒服を着た屈強なＳＰが張りついていて、その身を手厚く警護しており、彼女が一人きりで出歩く時間など、プライベートであっても無いに等しい――というのが、彼女を支持するファンの間では、当たり前の常識として知られている話だった。

それは風鳴翼の真の姿を知っている人間でも、同様のことだ。日々、人類をノイズから守護する役割を担っている特異対策機動部二課。その中で唯一の実質戦力として登録されている彼女が、たった一人きりで行動することなど、精々ノイズとの戦闘時くらいのものである。

《アーティスト》と《人類守護の切り札》という、二つの顔を持ち合わせている彼女。その両方を知る存在であるワタシであっても、それについては当然のことだと異論を挟まなかったし、そもそも疑いすら持たなかった。

どんな場面においても、その凛々しさと堅強さを失わない日本刀のような彼女。

ノイズを追って、ワタシが彼女と鉢合わせしてしまった際には、『風鳴翼』というこの少女の身体には、果たしてワタシと同じ赤い血が流れているのかと、幾度と無く思わされてきたものだったけれど。

そんな彼女が――予定していた仕事のスケジュールをすべてドタキャンして、たった一人で護衛も連れずバイクに跨りあてもなく外へ出掛けるような、そんな自由奔放でアウトドアな一面を持っていただなんて、いったい誰が想像出来ただろうか。

「――仕事をズル休みしたのは、これが初めてなんだ。ゆえに勝手がよくわからなくてな。よかったら、手伝ってくれないか？」

「ええ……？」

思わず、驚きの声が漏れてしまった。

本当に収納スペースなんてあるのかと思うくらい、スマートな流線型をしているスポーツバイクの車体から、二人乗り用のヘルメットを取り出して、彼女は微笑んでいる。

つまり、ドライブに付き合えということであるらしい。

予想外な誘いを前に、ワタシが返答に窮していると、彼女は持っていたヘルメットをこちらへ放り投げて寄越した。どうやらワタシに、拒否権は許されていないようだった。

この人、こんなに強引な人だったっけ……？

「なに、ズル休みをした者同士、気晴らしに出掛けてみるのもそう悪いものではないかと思ってな。コイツで風を切ると、心まで軽くなっていくような気分になる」

バイクのボディをブーツの先で軽く小突いて、翼さん。

「……」

バイクと徒歩じゃ、機動力に天と地ほどの差がある。ここで逃げてもすぐに追いつかれてしまうだろう。まぁ、翼さんがわざわざ逃げたワタシなんかを追いかけてきたりするとは少し考えにくいけど。

それにしても、あの風鳴翼が――ワタシと同じズル休み？　そんなことするようなタイプじゃ、絶対ないはずなんだけど……。

ワタシに、なにか個人的な話があるということなのだろうか。

だとしたら――もうシンフォギアさえも纏えなくなってしまったこのワタシに、一体どんな話があるというのだろうか。

ここは断わらないほうが、賢明かも知れない。
ワタシはそんな風に判断を下して、なにも答えずに無言で渡されたヘルメットを被った。
「ふふっ。これで立花も、私と共犯者だな。ここで私と出会ったということは、くれぐれも他言してくれるなよ？」
翼さんはそんなワタシを見て、満足そうに上機嫌でそう呟くと、また一度、バイクのエンジン音を轟かせてみせた。

バイクの二人乗りというのは実はと言うと、ワタシにとって生まれて初めての経験だったわけだけれど。
クラッチをスムーズに繋ぎ、弾丸のような加速力を生み出しながら、翼さんの操るバイクが高速道路の上を駆け抜けていく。
ワタシは振り落とされないように、前に座る彼女の身体へしがみつきながら、目まぐるしく変わっていく風景を前に、少しだけたじろいでいた。
ちょ、は、はやくない……？
車に乗っているときのそれとは全然違う感覚に、戸惑う。直に身体で風を受ける分、

バイクの座席シートの上で感じる体感スピードは、段違いだった。
一体これ、どのくらいスピードが出ているんだろう。
後ろの席からは、翼さんが見ているだろうスピードメーターが覗けないので、具体的な速度まではわからない。わからないが。
翼さんのことだ。きっと法的速度はきっちり守ってくれているはず。
……はず、だよね？
カーブに差し掛かったのか、ぐっと身体に掛かってきた強い慣性力に驚いて、ぎゅっと彼女の身体に掴まる力を強めた。なんだかみっともなく抱きついているみたいで、ちょっと情けない。
すると、吹き荒む風の音の中、翼さんの声があった。
『……おっとすまない。怖かったか、立花？』
「!?」
風を切る音以外、なにも聞こえなくなってしまうほどの速度。そんな中で突然、耳元で翼さんのクリアな声が聞こえてきて、ワタシの身体が驚きで跳ねる。
どうやらワタシが被っているこのヘルメットには、小型のインカムが取り付けられているようだった。二人乗りでも会話が可能なように、前もって翼さんが用意していた設備なのだろう。

ならばこちら側の声を拾うマイクも、どこかに搭載されているはずだ。そんなあたりをつけて、返事をする。

「べ、別に……怖く、ないです」

どれくらいの声量で話せばいいのかわからなかったが、どうやら向こう側にはちゃんとワタシの声は届いたらしい。ややあって。

『悪いな。これに跨ってる間は思わず、熱を上げてしまいがちなものでな』

悪い癖だ、と翼さん。

そして続けざまに自分の身体に掛かっていた重力が、少しだけ和らいだ。どうやらスピードを落としてくれたらしい。

だけど。

なんだかそれが、ワタシが怖がっているような構図に取られてしまったみたいで、少しだけカチンときた。

「……だから怖くなんか、ない。むしろもっとスピードが出せないのかなとか、そんなこと思ってたくらい。映画でそういうの、ちょっと憧れてたから」

つい、そんな風に強がりを言ってしまうワタシなのだった。言ってからしまったと焦ったが、時はすでに遅く、

『む？　そうなのか？　せっかく立花が私の後ろに乗ってくれているのだ。そういうこ

とであるのなら、少しサービスして見せてやらねば、礼を失するというものだな』

と、翼さんからそんな応答が入る。

あれ、これヤバくないか。自分で墓穴を掘ってしまったパターンじゃないのか。

ヘルメットの中で冷や汗を掻きはじめたワタシをよそに、翼さんはハンドルをぐっと握り締めた。そのまま流れる様な動作で、クラッチを足で踏み込む。

『立花をがっかりさせないためにも、私が日々研鑽し続けてきた人馬一体の妙技を見せてくれよう――しっかり掴まっておいてくれ』

「ちょ――あのっ」

待ってください、と。

そう言い終わる前に、ぐんっと感じたことのない重力感がワタシの身体へ襲いかかってきた。

思わず強がりを言ったことを後悔しそうになったワタシを、まるでその場へ置き去りにするかのような加速と共に、翼さんが駆るその鉄の怪物は、本領発揮と言わんばかりに牙を向いてみせたのだった。

決してスピードに怯えたわけではない。慣れない感覚を前に、身体の三半規管がつい

て行かなかっただけである。
　つまり何が言いたいのかと言えば、原理は車酔いと同じなのであって、それは人間にはどうやったって回避しようのない生理現象みたいなものなのである。
　シンフォギアを纏うことの出来ない今のワタシには、うっかりバイクの後ろから振り落とされてしまった場合に自分の命を守る術を持っていない為、過剰に反応してしまったに過ぎないのだ。
　そう、だから決してワタシが、大袈裟に怖がったわけではまったく無くて――
「だ、大丈夫か立花……？　水を持ってきたぞ、少しは落ち着くといいんだが……」
「……ありがとうございます」
　ベンチにぐったりと身体を預けていたワタシに、ヘルメットを脱いだ翼さんが、近くの自販機で買ってきてくれたらしいペットボトルの容器を差し出してきてくれた。
　礼を言いながらそれを受け取りつつ、ワタシはきちんと自分の足が二本とも地面に着いていることを、何度も何度も入念に確認している。
　へいきへっちゃら、へいきへっちゃら、へいきへっちゃら……。
「すまない……私としたことが少々、調子に乗り過ぎてしまったようだ……立花がこんなにも繊細だったとは」
　ぐさっ。

「帰りはもう少しゆっくり走ることをこの場で約束しよう」
ぐさぐさっ。
「……」
ワタシはなにも言い返すことが出来ず、貰ったミネラルウォーターの蓋を乱暴にねじ開ける。冷えた水の感触が、渇いた喉に心地が良かった。
そんな様子を眺めながら、翼さんがワタシの隣に腰を下ろす。
「……どうして」
「む？」
一息ついて、ようやく落ち着きを取り戻してきたワタシは、そこではじめて、翼さんの方へと向き合った。
「ワタシなんか……放っておいて、くれればよかったのに」
ワタシの口から最初に零れたのは、そんな疑問。
胸のガングニールを喪った今のワタシは、彼女が所属している機動部二課にとって、もはや一般人とさして変わらない。
以前までの『戦えた』ワタシならともかくとして、今のワタシはただの、彼女たちに護ってもらうだけの立場にある、民間人の一人に過ぎないはずなのに。
そんなワタシを翼さんがわざわざ構う理由が、ワタシにはどうしても思い付かないで

いるのだった。
「……相変わらず、どこまでも無愛想なヤツだなお前は」
「……」
　ワタシの言葉を訊いて、翼さん。
　なんだか呆れた調子の含んでいる声だった。そんな彼女に、ワタシはまたしてもムッとしてしまう。
「それとも『昨日は助けてもらってありがとうございました』とでも、言ったら良いんですか？」
　露骨な挑発の意を込めて、翼さんに皮肉をぶつける。
　口にした反面、あぁどこまで自分は嫌なヤツなんだろうかと、そんな自己嫌悪がワタシの胸を塞いだ。
「……そんな苦しそうな顔で挑発されても、挨拶に困ってしまうな」
「っ」
　しかし、対する翼さんはどこ吹く風で、苦笑気味に掛けていたベンチから腰を浮かせてみせた。
「――さぁ、それほど毒を吐く元気があるのなら、休憩はこのくらいで構わないだろう。目的地はもうすぐそこなんだ、支度をしてくれ」

「……目的地って、どこへ」
「それは着いてからのお楽しみだ」
普段の彼女らしからぬ強引さに、ワタシも有無を言わさずにベンチから立たされる。
文句やぼやきの一つでも言ってやりたいところだったが、先ほどあっさり受け流されてしまったばかりなのもあって、なんだかそれさえも上手く出来なかった。
「今度はゆっくり走ろう。立花が怖い思いをしないように」
「こ――怖がってませんっ！」

◇　◇　◇

目的地はすぐそこだと言った翼さんの言葉は、実際にその通りだったようで。
再びワタシが翼さんの後ろに乗り込んで１０分と経たない内に、その場所には辿り着いていた。
「さぁ――着いたぞ」
翼さんの言葉を聞いてから、ワタシは地面に足をつけると、被っていたフルフェイス

のヘルメットを外す。
ただでさえ癖っ毛な自分の髪が、ヘルメットに抑えつけられていたせいで変に型が付いてしまったらしく、少しだけ鬱陶しい。
前髪を撫で付けながら、ヘルメットを取ったおかげで広がった視界を見渡してみると――

「――ッ。こ、ここって……ッ！」

予想外の衝撃に、思わず言葉に詰まってしまった。
『その場所』に着くまで――ワタシは気が付かなかったのだ。
バイクを止められるまで、自分たちがどこへ向かっているのか。
周りの風景を見ていれば大体の察しが付いても良さそうなものだったというのに、その建物を眼前にするまで、ワタシの意識はいっそ不思議なほどに『そこ』へ向けられなかった。
ずっと下を向いて俯いていたから――気が付かなかった。

そこは、巨大な建物だった。

近未来的な独特なデザインをした、ドーム状の施設。翼さんと二人だけじゃあ、思わず雰囲気に呑まれてしまいそうになるほど、広大な面積を有しているその場所にはしかし、ワタシたち二人以外の誰の気配も感じない。

がらんどうとしていて、ワタシたち以外の人間の姿が全くない――当然だ。

なぜならこの場所は、久しく人の出入りが禁じられた場所であり――忌み嫌われている場所であるはずの、そんな場所なのだから。

「……な、んで」

ついさっき水を飲んだばかりなのに、喉が干上がっていくような、嫌な感覚に襲われる。

そこはかつて――大規模な催しが毎日のように開かれる、超大型の屋内型会場施設だった。

数百人規模での観客の収容が可能な、かつてのこの場所は、歌手や競技者などの業界人にとって、憧れの地として等しく認識されるような、そんな場所だったのである。

国内屈指の広大さを誇る、近未来感をコンセプトに設計された、芸術的なデザイン。多くの人々を魅了し続けてきた、娯楽文化の発信地。

――それが、近代日本史上最悪とまで言われる災害事故によって、たった一日で跡形もなく倒壊し尽くされたのは、今から3年以上も前のことである。

「……驚いたか？　実は秘密裏に、政府主導で改修工事が行われていたのだ」

ワタシの脱いだヘルメットを、バイクの中へと収納しながら翼さんが言う。

「な――なんで」

そう繰り返すのが、やっとだった。

もう二度と目にすることはないと思っていた、目の前の景色に、ワタシの思考は完全に停止してしまう。

なぜならこの場所は――この場所こそが。

ワタシの――『立花響』の人生すべてを破壊し、そして、そのなにもかもを奪っていった、そんな場所なのだから。

「……立花にとっても、因縁が深い場所だろう」

翼さんの呟くような言葉に、ワタシはハッとして振り返る。

彼女は、停めたバイクの車体に身体を預けるような格好で、ライブ会場の外観を眺めていた。

どこを見ているわけでもない、ここではないどこか――遠い場所を映しているような、そんな眼。感情の見えない眼だ。

そうか、この人にとってもこの場所は――

「……さぁ。今日は特別に許可をもらってきているんだ。せっかくだから、中も見ていこうじゃないか」

翼さんが、そう言っておもむろに歩き出した。

ワタシはそんな彼女になにも言えず、ただそれを後ろから追いかけることしか出来ないのだった。

現代史上類を見ないほど、夥しい数の犠牲者を出してしまったライブ会場での特異災害事故。

事故後、特別封鎖区画として日本政府によって管理されていたこの場所には、一般人はおろか犠牲者の遺族でさえも、不用意な立ち入りを規制されていたという。

当然だ。ここで命を落とした人間の数は、１０や２０などではない。それこそ想像すら出来ない数の、大量の死者を生み出してしまった土地なのだから。

事故が発生した3年前のあの日――ここでは、ある超人気歌手ユニットの二人が、ソングライブを行っている真っ最中だった。

天羽奏。そして、ワタシの前を歩く彼女――風鳴翼。

『ツヴァイウィング』。
あの日、客席には一つの空席も見当らないほど多くのファンが、会場内に詰めかけていて、彼女たちの歌を心の底から楽しんでいた。
そして会場内の熱狂がピークに差し掛かかろうかとしていたそんなとき、突如として会場に現れたのが――ノイズ。
少し触れただけで人体をあっけなく炭素分解させてしまう、悪魔のようなその化け物達の群れはなんの前触れもなく、観客の前に姿を現した。
数百もの席を埋め尽くしていた観客たちは、突如として出現した特異災害を前に、なす術もなく一斉にパニックを起こして逃げ惑っていった。
つい数十秒前までは、幸福が満ちていたはずのその空間には、瞬く間に悲鳴と怒号が溢れ返り、歓声の代わりに辺りを飛び交ったのは、我先に逃げようとする人々と、それを襲うノイズ――そして人〝だった〟炭素の塊。
まさに阿鼻叫喚の地獄絵図へと様変わりしたのだった。
そして3年前のあの日。
ワタシもその地獄の真っ只中に――立っていた。
「……大丈夫か、立花」
誰も居ない、静まり返った会場内。

ステージ壇の上へと立った翼さんからのそんな問いかけに、ワタシはハッと我に返る。

「随分、顔色が悪いぞ……この場所に誘ったのは、やはりまずかっただろうか」

こちらを気遣うような、そんな翼さんからの言葉。

翼さんとは少し離れた場所――観客席にただ立ち尽くしていたワタシは、ステージに立った彼女に、自らの表情を隠すように下を向いた。

「……べつに。それを言うのなら貴女の方だって、顔が青いよ」

「……そうか。そう――かもしれないな」

ワタシの指摘を受けて、翼さんは壇上で力なく微笑む。

ワタシと彼女、たった二人しか居ない会場の中は、耳に痛いほどの静寂に満ちていて、ただそこに立っているだけで、言い表しようもない不安感に駆られるかのようだった。

ここで起きた、凄惨な悲劇。

生き残った者より死んだ人の数のほうが多いという、そんな悪夢みたいな現実の中には、ライブを主催していた側の人間も数多く含まれていたという。

その中でも、とりわけ目を引く存在。それが――天羽奏。

あの日、ライブを開催していたボーカルユニット『ツヴァイウィング』の片翼であり――そして翼さんの、欠けがえのない存在だった人。

そしてワタシに、胸の歌を託してくれた人。

「……もう3年以上も経つと言うのに、締め付けるようなこの胸の痛みは、一向に収まってくれる気配がない」

また、翼さんが遠い場所を見つめるような目をしている。

あの日あのとき。

この場所で、共に背中を預け合いながらノイズと戦った仲間のことを――見ているのだろうか。

「……」

ワタシは、なにも言うことが出来なかった。

『天羽奏』という一人の少女のことをよく知らないワタシには、翼さんに投げ掛けてあげられるような言葉なんて、何ひとつ持ち合わせてなどいなかったから――あるいは。

観客のいないステージの上。その中心で、憂いの表情を浮べて佇んでいる、孤独な歌姫の立ち姿に、ただ言葉も忘れて見入っていただけなのかもしれない。

「――ここに来て、私と一緒に、立ってみないか？　立花」

遠い目をしていた彼女の瞳がそこで、観客席にいたワタシを映す。手招きこそしてい

ないが、囁くような彼女の問いかけには、少女らしくもない妖艶な響きが籠もっているようにワタシには感じられた。

ワタシの視線と、ステージの上に立つ彼女の視線が、真っ正面から交じり合う。

「……ワタシには、そんな資格はない」

会場に差し込んだ陽光によって、輝いて見えるステージの上と、日陰になって暗い観客席ではまるで、別の世界同士であるかのようだった。

ワタシは、答える。

そんな眩しい場所に行く権利なんて――ワタシにはない。

「――資格？　誰かの隣に立つことに、いったいなんの資格が要るというの？」

ステージの上で静かに問うた翼さんの姿は、まるで美しいアカペラを披露するオペラ歌手のようだ。ならばそれを遠くから眺めているワタシは、それを見ている観客の一人に過ぎない。

そう、それはあの日のワタシと同じだ――観客席から彼女の姿を夢中で追いかけていた、あのときと。

「……ワタシが纏っていたあの槍は――奏さんのモノだから。あの日ここで、命を賭けて、みんなを護るための歌を歌っていた、奏さんのモノ……それを、たまたま横から掠め取っただけのワタシが――たまたま近くに居ただけのワタシが、貴女の隣に立つこと

なんて、許されるハズがない」

あの日、あのとき。

もしワタシが、奏さんに命を救ってもらうことがなかったら――ノイズによって物言わぬ灰へと還されていたのなら。

そんな風に考えたことが一度もないと言えば、それは嘘になってしまう。

もしもあのときに、ワタシが死んでさえいたのなら。なにもかもを喪って、この世界に心の底から絶望することなんて、実はなかったのかもしれない。

骨が凍えるような、あの寂しさも。誰にも助けてもらえないときの、あの胸の痛みも――知らずに済んでいたのかもしれない。

……違う。それはただの言い訳だ。

言い訳まみれの自分の人生の中で、最も醜くて汚い、最低の言い訳だ。

――生きるのを諦めるな。

瀕死だったワタシにあのとき、奏さんは叫んでくれた。自らの命すらすべて燃やし尽くして、ワタシのことを救ってくれた。

『誰も助けてくれなかった』なんて、ただの薄っぺらい恨み言だ。

たとえその後のすべてに絶望することになっても――あの日あのとき、ワタシのことを真っ先に助けてくれていたのは、血を吐きながらも歌うことをやめなかった、あの人

なのだから。
……だからこそ、ワタシには翼さんの隣に立つ資格なんてない。
奏さんが授けてくれたチカラを――誰かを護るための歌を、自分の八つ当たりじみた復讐の為だけに使い潰したワタシが、翼さんの隣に立てるわけがない。
「……ふっ」
しかし、そんなワタシの言葉を訊いて、翼さんは――
「ふふっ……なるほど、ははっ……なるほどな」
くすくすと肩を震わせながら、笑っていた。
「……なんで、笑うの」
自分の？偽りない本当の気持ちを一笑に伏されたと思ったワタシは、彼女のことを睨み付ける。ワタシの言葉は、彼女にとってそこまで滑稽だったというのか。
「あぁ、すまない。違うんだ。違うんだよ、立花――やはり、世界を渡ってきた彼女たちの言葉は正しかったんだと、そう思うと」
嬉しかったんだ。と。
翼さんはそんなことを呟いた。
「……は？」
「……これは逆に私からの質問なんだが、私が再三に渡って立花のことを二課に誘った

際、すげなく断られ続けていたのは、もしかしてそれが原因だったのかな」
「……それは」
そうだ――とも単純に言い切れない。
あのときのワタシは、誰かに裏切られる痛みがとても恐ろしくて、信じるという行為そのものに耐えらなくなってしまっているほど、脆くなっていたから。
どこの誰であろうとも、それがどんな言葉であろうとも、信用するものかと頑なに心に決めていたから。
でもいつだって、そんなワタシの根底にあったのは、あの日ワタシを助けてくれたあの人の――奏さんの意思を、自分の為だけにしか歌えない、湿ついた後ろめたさだったことは、言い繕いようがない事実だった。
「まったく――お前が一緒に戦ってくれていたら、どれだけ心強かったことか」
「……ごめんなさい」
ワタシは、謝った。
彼女からの誘いを拒み続けていたことに対しての謝罪――ではない。
「奏さんのガングニールを――奏さんの歌を、喪くしてしまって」
「……」
翼さんが、ワタシの言葉に押し黙る。

ずっと心の奥底に沈んでいた気持ち――ずっと自分の中で引っかかっていた気持ち。それは奏さんが遺してくれた意思を、自分の弱さのせいで消してしまったという、そんな負い目。

「まったく――お前は、どこまで真面目が過ぎるんだ」

よくもそんなにガチガチで、今までポッキリいかなかったものだよ。

静かな会場の中。翼さんの歌声のように澄んだ声が、ワタシの耳に届く。

顔を上げるとそこには、翼さんの困ったような笑み。

「立花、お前が私に謝ってみせたように、一つ、私からもいいだろうか？」

私からはお前に――礼を言わせてもらいたいんだ。

「お、れい……？」

「奏の歌を――大切に想ってくれて、ありがとう」

「ッ!!」

世界を渡る孤高の歌姫は、観客のいないステージの上で微笑む。まるでその場所こそが、自分が在るべき場所に相応しい地であるかのように。

「ど――どうして」

「どうしてもこうしても、当然だろう？　かつて、奏の片翼であった身として、お前がそんな風に奏の歌を大切に想ってくれていたことが知れたのだ。こんなに嬉しいことは

ないさ」
「……でも、ワタシは」
　ワタシは、そんな大切な奏さんの歌を今までずっと……。
「立花――お前は一つ、勘違いをしているよ」
　翼さんは言った。
「お前は『天羽奏』という、一人の少女の代わりではない――ましてや、彼女が携えていた槍を、横から掠め取っただけの盗人などでも決してない」
「代わりじゃ、ない……？」
「お前は他の誰でもない――立花響だろう？　奏の歌を大切に想ってくれる、私の友人で、灰の舞う戦場で何度も私と共に戦ってくれていた、心強い戦友さ」
　私は誰かに、奏の代わりになって欲しいわけではない。立花――お前だから、一緒に戦い続けてきたお前だからこそ、私と一緒に飛んでもらいたいのだ。
「独りで歌い続けるのは、もう疲れただろう？　この私と一緒に――飛ばないか、立花？」
　ステージの上から、観客席にいるワタシに向かって、手を差し伸ばす彼女。

「……」

ワタシはそれを見て、身体を震わせる。

ワタシはもう――独りじゃ……ないの……？

一緒に暮らそうと言ってくれた未来。そして、目の前で手を差し伸べてくれている翼さん。

そして――世界を渡ってまでして、暗い場所に居たワタシを照らし出してくれた彼女。

もしもワタシに、差し出されたあの手を、握り返す資格があるのなら……。

今すぐにでも手を伸ばして、それを握りたい。暖かなお日様の光を身体いっぱいに浴びたい。

でも、それがたまらなく怖い。

もしまた、裏切られたら――そう考えるだけで、泣き出してしまいそうになるほど恐ろしい。そうなってしまえばワタシは今度こそ、世界を信じることが出来なくなってしまう。

手を握ることが、怖いよ……。

――大丈夫だよ、響。

「ッ」

手を握り締めて怯えていたワタシの耳に、ここにはいないはずの彼女の声が聞こえてきたような、そんな気がした。
――言ったでしょ？　武器を持たないあなたのその両手が、誰よりも人と手を繋ぎたいと想っている証拠。
――その手こそが、立花響のアームドギアなんだって。

――だから、大丈夫。へいき、へっちゃらだよ。

「……あ」
気が付けば。ワタシは歩き出していて。
「――よくぞ、私の手を取ってくれたな、立花」
目の前にはにっこりと笑っている、翼さんの姿があって。

ステージの上。
どこまでも暖かい太陽の温もりが、ワタシの身体を照らし出していた。
「……今までいろいろと、すみませんでした」
「うむ。問題ない」

改めてよろしく頼む、立花。と。

力強くワタシの手を握る翼さんの手の感触に、少しだけ戸惑いを覚えながら、ワタシは小さな、本当に小さな声で「……はい」と返事をしたのだった。

第二章　雲滲む陽射と、差し込んだ光明　中

◇　◇　◇

それから、ワタシたちは色んなことを話し合った。
今までにあったノイズとの戦いについての話や、お互いの日常生活について。奏さんを初めとした、機動部二課に居る人たちのこと。
話し合うといっても、翼さんが一方的に話して、それに対してワタシがただぶっけらぼうに相槌を打つだけの事だったが、翼さんはまるでそれが楽しくて仕方がないといった様子で、夢中で話し続けていた。
まるで――仲の良い友達と話しているみたいに。
それがなんだか、ワタシには少しだけくすぐったかった。
そして。
そんな彼女の口から、数週間後にこの場所――ライブ会場で、慰霊祭を兼ねた大規模な歌唱ライブを開催する予定であることも、教えてもらった。
「……そう、なんだ」

「あぁ。まだ世間には公表をしていない、いわゆるオフレコというやつなんだ。立花のことは信頼しているが、くれぐれも無闇に他言してくれるなよ？　まだ身の周りにいる関係者でさえも、緘口令を敷いてもらっているくらいなのだ」

翼さんはそう言って、悪戯っぽい笑みを浮かべていた。

やっぱり――凄いな、この人は。ワタシはそんな彼女の表情を、横目で盗み見るようにしながら、そんなことを思っていた。

かつて一番大切だった人……奏さんを、この場所で亡くして――それでも、彼女はちゃんと一人で立ち直って、そしてしっかりと前を向きながら、また歩き出そうとしている。

どれだけ――そう、どれだけ、今まで辛い思いをしてきたんだろう。どれだけ一人ぼっちで泣いて、そして眠れない夜を過ごしてきたんだろう。

翼さんが今なお変わらずに抱き続けているその悲しみは、ただの部外者であるワタシなんかが、決して推し量れるようなものでは全然ないんだろうけれど。

それでも――ソレが、どんなものよりも苦しいモノだっていうことは、よく知っていた。

他でもないワタシだからこそ――よく知り尽くしていた。

それでも彼女は。

たった一人きりで、誰の手も借りないで――自分の中でしっかりとその悲しみに対して区切りを、整理を付けようとしている。

凛々しく前を向いて、あの地獄みたいな苦しさを相手に、真っ向から立ち向かおうとしている。

それこそが風鳴翼という、1人の人間の在り方であって――強さだった。

悲しみや絶望だけに囚われることなく、人類の為に今だってこうしてノイズ達と戦い続けている彼女の、そんな真っ直ぐで固く纏まった意思。

それが、ワタシの目にはとてもカッコよく映って。なにをするにも素直になれないワタシだけれど、ただ今だけは素直にこの人に――憧れてしまった。

もしも、彼女のようにワタシも気高く、そして強く在れたのなら――そんな風に、場違いにも考えてしまうくらいに。

穏やかな表情で、ライブ会場の景色を眺めている翼さんの横顔。ワタシはそんな彼女の勇ましい姿に、すっかり目を奪われてしまう。

それに比べて――自分は。

ありきたりなそんな自己嫌悪の念が、まるで降って湧くみたいにワタシの胸を塞いできて。

弱くて脆くて。今だって自分の気持ちさえもよく分かっていないこんな自分が、とて

も情けない、すごく惨めなモノであるように思えてしまう。
もしも、こんなワタシの中に少しでも、彼女のような〝強さ〟が在ったのならもっと――否。
（……いったい、なにが出来るって言うんだ）
胸の歌を喪った自分に。ガングニールを失った自分に。
もう今さら出来ることなんて、なに一つ残されていやしないのに。
「そういえば、聞いたぞ立花。世界を渡ってきたあの少女……小日向、だったか。彼女と同じ――いや、実際には別の人物になるのか――とにかく、こちらの世界の小日向が、今度リディアンに転入してくることになったそうじゃないか」
翼さんがふと思い出したように、そんな話題を振ってきた。
なんで翼さんがそのことを知っているんだと、少しだけ不思議に思いかけたワタシだったが、そもそもリディアンは機動部二課と所縁のある施設らしいので、それを翼さんが知っていても何もおかしくはない。
「え、まぁ……はい」
「ふふっ、良かったじゃないか」
「……べ、別に」
なんだか、茶化されているみたいで少し面白くない。ワタシはそっぽを向くのと同時

に顔を伏せて、自分の表情を翼さんに見えないようにした。
「どうだ？　新生活の感触は」
翼さんが興味深そうに、質問を重ねる。
「なんだか――落ち着かない……です」
独りきりで居るのが、ずっと当たり前になっていたから。
こんな自分が今さら、誰かと一緒に生活しているところなんて、想像すら出来ない。
「ふふ、これからもう立花は『独りきり』などではないさ――小日向がいつだって、立花の傍に居てくれるのだろうし、そして立花だって、私の『隣に立ってくれる』とさっきそう約束してくれたばかりじゃないか」
「……うぅ」
なんだか今になって、すごく気恥ずかしくなってくる話だ。こうして冷静に振り返ってもみれば、もしかしてさっきの自分は、かなり恥ずかしい真似をしてしまっていたのではないのだろうか。
「……ふふっ、直に慣れるさ」
思っていたよりも存外『誰かと共に居られる』というのは、それほど悪くないモノであるらしいからな。
「……え？」

それはどういう意味だろう、と。少しだけ顔を上げて、翼さんの方を窺ったワタシ。
「いやなに、立花とこうして手を取り合えたことがよほど嬉しいのか、それとも、これからは私の隣に立花が居てくれるというその事実が、とても心強く思えるのか……さきほどから私の心は――とても清々しい気分なのでな」
にっこりと、そこにはなんだか年頃の少女のように可憐な笑顔を浮かべながら、ワタシのことを見ている翼さんの顔があった。
「～～ッ!?　ば、馬鹿じゃないの……ッ」
かぁっと顔に熱が集まっていくのが自分でもわかって。
ワタシは慌ててもう一度そっぽを向き直した。もうぜったい翼さんのほうは見ない。決めた。
「ははっ、すまない。少し悪意地が過ぎてしまったようだな?　立花とこうして笑い合える日が訪れたことに、ガラにも無くのぼせ上がってしまっていたらしい」
翼さんはおかしそうに噴き出すとそして、続けた。
「だからまぁ、その……なんだ。お前はもう――独りきりなどでは、ないよ」
これからは私達が――お前の傍にいる。
「――ッ!」
あぁ、もう。どうしてこの人はこうもいちいち……ッ。

芯が通っていて、どこまでも強くて格好良くて――頼もしい先輩なんだろうか。
ワタシはこんな人とずっと、自分勝手なわがままを張りながら、戦い続けてきたのか……。
「――怖いん、です」
気が付けば。ワタシはそんなことを、彼女に零していた。
「……怖い？」
今まで誰にも零したことのない、ワタシの嘘偽りのない気持ち。生まれたままの、そんな弱い感情。
「こんなに幸せでいいのかなって……。こんなに恵まれていて……いいのかなって。ちゃんと嬉しいハズなのに、ちゃんと報われているハズなのに――それでもまだワタシの心は、どこかでこの幸せが、一瞬でぜんぶ崩れていっちゃうんじゃないかって、そんな嫌な想像ばかりをしているんです……」
それが――とても怖い。恐ろしい。
一度漏れてしまったそれは、まるで堰を切ったみたいに漏れ続けていく。俯いた姿勢のまま、ワタシはその薄暗い感情をただ彼女に向かってぶちまけていた。
ずっと考え続けていた、自分の奥底にあった嫌な気持ち。誰にも言えなかった、そんな弱々しい本音。

「もう……嫌なんです。大切なものを喪うのは――ワタシの手から、ぜんぶ零れ落ちていっちゃうみたいな、あの感覚が」

未来と離れ離れになってしまった、あのとき。

お父さんが家を出て行ってしまった、あのとき。

周囲の人たちから心無い罵声や暴力を向けられた、あのとき。

「世界はいとも簡単に、ワタシの『大切なもの』を全部壊していこうとするから――それなのに」

それなのに。

今のワタシはもう――

「そんな残酷な世界に、抗うことが出来たはずのチカラを――失くしてしまった」

『もしも』、ワタシの周りの人達がまた、危険に晒されるようなことが起きてしまったら？

昨日ワタシが救おうとした、あの小さな女の子が『もしも』、自分の身近な人だったのなら？

護るために――抗うために。

そんな風に、ワタシはもうこの拳を握ることが出来ないのに。

心の底から『護り抜きたい』と思えるような、そんな存在が。

大切にしたいと思えるような、そんな未来がやっと――やっと出来たのに。
八つ当たりのように、色んなモノを壊し続けていたワタシの拳では――もはや満足に、握り締めることすら、叶わなくなってしまったのだから。
それが、とても――言葉に出来ないくらい、本当に、恐ろしい。
怖くて怖くて、たまらない。
「ワタシには、もうなにも……出来ないから……ッ！」
途切れ途切れになったワタシの言葉を、しかし翼さんは途中で遮るようなことをしないで、ただ黙って聞き続けてくれていた。
やがて。
「――案ずるな」
と、そんな風に告げる。
「その残酷な世界とやらが、立花の大切なモノを壊しにくるというのなら」
そのふざけた世界ごと――私の剣が斬り払ってみせる。
ワタシはハッと顔を上げて、彼女のほうを見た。
口元には不敵な笑みを浮かべて。真剣な瞳をこちらに向けている翼さんと、真っ向から視線が交ざり合う。
「知らないのか？　防人の剣はどこまでだって届く、不屈の切っ先だ。自分の友人が大

切にしているモノくらい、容易く護り抜いてみせよう」
「ゆ――友人？」
予想外な翼さんからの言葉に、露骨に面食らってしまう形になってしまったワタシ。
そ、それって、ワタシのこと……？
「む……違ったのか？　私はもうすっかりその気でいたのだが……なんだか外してしまったようで、少し面映いな」
「……～～っ」
本当に、この人には敵わない。
どこまでも真っ直ぐで、力強い響きを伴った翼さんの言葉は、まるでワタシがずっと抱えていた悩みなんかすごくくだらないことだったみたいに、スパッとワタシの胸の中に入ってきた。
もしも。そう――『もしも』。
以前の、あの八つ当たりみたいに戦い続けていたあの頃のワタシに――ほんの少しでも『誰かと手を繋ぐ勇気』があったのなら、きっと今ごろ、もっと違った現在があったのかもしれない。
そう、それはまるで〝あっち〟の未来と一緒に居るという――もう一人の『ワタシ』と同じ様に。

……でも、今この場所に居るのは、そんな強くて勇気のある立花響じゃあない。
弱くて脆くて、ずっと色んなことから逃げ続けて生きてきた、情けない立花響だ。
そんな事実が、少しも悔しくないと言ったら嘘になってしまうけれど。
一人じゃない、と。
そんな風に言ってくれる人が、ワタシの傍に居てくれるのなら――。
ワタシは無意識に、ぎゅっと拳を握り締めていたのだった。
「……さぁ、そろそろ時間も良い具合に潰れた頃だろう。このままバイクで、立花の寮の前まで送ろう」
おもむろに立ち上がった翼さんが、そう切り出してきた。
それを受けたワタシも、その場で立ち上がる。
なんだかまだ恥ずかしい気がして、まともに翼さんと顔を合わせられなかった。そんなワタシを気遣ってか、翼さんがまたイジワルな顔を作る。
「今度はちゃんと、立花が怖い思いをしないようにゆっくりと運転するから安心していてくれ」
「……ッ！　だ、だからッ、別に怖がってなんか……ッ！」
そんな翼さんにムッとして、ワタシがまた文句を言おうとした、そのときだった。
――ウゥウンンン。

『ッ!?』

お腹の底にずんと沈み込んでくるかのような、そんな低い音をした警報サイレンが、どこからともなく辺り一帯から響き渡ってきた。

それと同時に、翼さんが携帯していたらしい通信機が、けたたましい着信音を鳴らす。

「――はい、翼です。……はい、……はい。……了解しました、すぐに現場へ急行しますッ」

躊躇することなくコールを取って、さっきまでと打って変わった険しい表情を浮かべる翼さんは、通話先の人間と何事かを話していた。

『ソレ』が一体どんな『事態』を意味しているのか。

それがわからないワタシではなかった。

「……ッ、すまない立花、寮まで送り届ける件なのだが――」

「いいよ、別に。ワタシはここから、歩いて寮まで帰るから……だから、心配しないで。それより翼さんは、早くノイズを……ッ!」

ワタシは迷うことなくそう答えて、彼女の目を見た。自分なんかに時間を取られれば、それだけ翼さんの行動に遅れが出てしまう。

そんなことになってしまえば、それこそワタシは名実共にお荷物の足手まといだ。

「すまないッ、恩に着るッ!」

翼さんはそう言うや否や、自分がバイクを停めていた方向へと向かって、走り出していった。

が、途中で――なにを思ったか、彼女は足を止めてこちらを向くと、一言。

「今日は立花と話が出来て、とても楽しかった。今度はまた場を改めて、色んな話をしよう」

「……ばっ、馬鹿なの？　は、早く行きなよ」

それだけ言い残すと、少しだけ微笑んで見せた翼さんは、そのまま颯爽と今度こそライブ会場から出て行ってしまった。

こういうとき、マフラーで表情を隠せなくなってしまったことが、少しだけ悔しかった。

まさか、こんなくだらない理由でギアが欲しくなるだなんて、思いもしていなかったけれど……。

「――奏さん」

自分以外の誰も居なくなった、たった一人きりのステージの上。

かつて、そこで命を燃やす歌を口にしてまで、ワタシの命を救ってくれた恩人の名を、ワタシはふと口にする。

「どうしてワタシは――」

あぁ、なんで。こんなときにワタシは、翼さんのチカラになることが出来ないんだろう。

ワタシの傍に居てくれると――そう約束してくれた、大切な人なのに。

「……奏さん」

ワタシはもう一度、あの人の名前を呼んだ。

願わくば。翼さんが無事に戦いを終えて、帰ってきてくれることを。

ワタシは祈るようにしばらくの間、独りステージの上で、立ち尽くしていたのだった。

しかし――このときのワタシは、すっかり忘れてしまっていたのだった。

すっかり失念して、無意識に考えないように勝手に、頭の片隅へと追いやってしまっていた。

これまでの『立花響』という、一人の不幸な人間の人生において。

そんな風に儚く、そして祈るように想った願いであればあるほどに。

まるでどこかの誰かに、それを嗤いながら嘲けられるように――踏み躙られてしまうという、そんなどうしようもない経験則のことを。

すっかり、忘れてしまっていた。

立花響はどこまでも、呪われている人間だったということを。

◇　◇　◇

「もういい翼アッ！　一度撤退して、形勢を立て直すんだッ！」
《特異災害対策機動部二課》の中枢である発令所内で、司令である風鳴弦十郎の、そんなひときわ鋭い怒号が轟いた。
「《アメノハバキリ》のフォニックゲイン数値が低下ッ――くそっ！　止まらないッ！　このままではギアのバリアブルコーティングが、維持不可能な値にまで達してしまいますッ！」
人類守護の最後の拠点であるハズのその場所には、先ほどからけたたましいほどの異常事態を報せるアラートと、オペレーターによる緊迫した現状報告の声とが、交互に入り乱れていた。
その場にいる全員が固唾を飲みながら、発令所内のライブモニターを見つめている。
そこに映し出されているのは、とある都市近郊部を映した衛星映像だった。
夥しいほどの特異災害《ノイズ》の姿と、そして――その中心で今にも飲みこまれそうになりながらも、剣を振るい続ける、蒼い閃光を携えた一人の少女の姿。
都市の一部であったハズのその景色は、すでに長時間に渡る戦闘の余波によって、辺り一面が物言わぬ瓦礫へと変わり果ててしまっている。

『……撤退は、できません。防人である私が退けばその分、誰かの平穏が脅かされてしまいます』

――千の落涙。

少女が携えていた一振りの剣を天へと仰ぎ向けると、モニター画面一面が弾けるようにして蒼い光の激流が巻き起こった。

ようやく光が収まると、あれほど少女の周りに詰め掛けていた大量のノイズが、一斉に炭の塊へと化して、霧散するように消え失せていた。

迫り来るノイズの群れによって、すっかり覆い隠されようとしていた少女の姿が、一瞬だけモニターの中で鮮明に映りこむ。

身体の端々には幾つもの痛々しい生傷。第一号聖遺物《アメノハバキリ》の象徴ともいうべき青色の装甲には、大きな亀裂がいくつも入っていた。

満身創痍。モニターを見ていた誰もが、その四文字を頭の中に思い描いてしまったほど、モニターに映った少女の姿は酷いものだった。

「つ――翼アッ!!」

戦闘指揮を全任された司令官であり、そして血の繋がった叔父でもある弦十郎の口から、もう一度緊迫した怒号が上がる。

『――大事ありません。私の切っ先は、防人の切っ先。どれだけの異敵を討ち取ろうと

も、防人の剣が刃を零すことなどありません』
スピーカーから返ってくる、少女の声。
『それに――ようやく叶ったのです。共に〝立ってくれる〟と。あのへそ曲がりな彼女が、そんな約束を交わしてくれた……ならば私には、彼女の生きる平穏な世界を護りきる義務がある』
残存していたノイズが、一斉に少女を目掛けて猛進してくるのが見えた。
「つッ、翼ちゃんッ!!」
現況をモニターしていた友里オペレーターから、悲鳴交じりの絶叫が上がった。
『彼女とまた――歌を謡うために』
すぐ眼前にまで迫って来ている絶体絶命の脅威。少女は携えていた剣をもう一度、ゆっくりとした動きで構え直していた。
『これくらいの窮地など、容易く斬り払ってご覧に入れましょう』
まるでそれが戦いの合図だったかのように。
少女はただ前へと、ひたすら駆けていた。
少女の――風鳴翼の瞳には、どこまでも真っ直ぐで、そして力強い意思の輝きがまるで蒼炎のように、ただ静かに燈っていた。

◇　◇　◇

病室は――嫌いだ。

どこにいても鼻をつく、消毒アルコールの嫌な匂い。目に痛いくらいにどこまでも真っ白で、汚れを嫌っている潔癖な壁とベッドシーツ。

白一色で統一された、その空間。

現実世界から四角く切り離されているかのような、その場所に居るだけで、自分の中の時間がピタリと止まってしまったんじゃないかという、そんな実体のない不安感に駆られてしまう。

ワタシはそれがたまらなく――吐き気を催してしまうほどに、大嫌いだった。

ワタシにとってその〝色〟は紛れも無く、あの苦痛を極めたリハビリ生活を嫌でも思い出させる、そんな象徴だった。

今から三年前。

一命を辛うじて繋ぎ合わせた、あの大手術を終えて。

日常生活へと一日も早く復帰を果たすために、ワタシは毎日のように地獄のように辛いリハビリに必死で耐え続けていた。

痛くて痛くて、何度も何度も心が折れそうになったけれど、これさえ乗り切ればきっ

と色んな人たちに――元気になって良かったと、そう言って笑顔で喜んでもらえると。
そんなことをただ信じ続けて――歯を食いしばって、頑張っていた。
しかし。そんなリハビリ生活を乗り越えた先で、ワタシのことを待っていたのは。
たくさんの顔の無い人達から向けられる、酷い言葉の数々と嫌がらせの毎日だった。
『あのまま、死んでいたら良かったのに――』
今となってはもう、誰から言われたのかさえはっきり思い出すことの出来ない、そんな無慈悲な一言に、ワタシの心はすっかり枯れきってしまって。
陽だまりの届かないその場所は、どこまでも暗くて――そしてなにもかもが凍えてしまうくらい寒い、そんな酷い場所だった。
地獄のようなリハビリを乗り越えた先にあったのは、本物の地獄だけだった。
そう、だから――病室は嫌いだ。
真っ白に塗りつぶされたこの場所はとても残酷で、ワタシの陽だまりを壊した象徴だったのだから。
そして、それは今だって同じ――

「……幸いなことに、命に別状はないそうだ。ただ、無茶な戦闘による負荷と疲労によっ

て、極限まで体力が衰弱しきってしまっている。しばらくは絶対安静が必要になるだろう」

四角く切り取られた真っ白なその空間の中で、悔しさが滲んだような表情をした風鳴弦十郎が、そんなことを教えてくれた。

しかし、今のワタシの頭では、そんな弦十郎からの言葉さえ上手く理解出来ていたのかも怪しかった。

なぜならワタシの目は――部屋の中の一点を映したまま、ずっと釘付けになってしまっていたのだから。

ベッドも壁紙も、机も棚も何もかもが白色に染まったそんな四角い世界で、たった一つだけ存在する別の色――それは鮮やかな、青。

呼吸器をつけられて、ただ静かに瞳が固く閉じられたまま、ベッドに横たわらされている彼女の姿。

それをジッと眺めながら、ワタシは全身の血液が足先から逆流してきたような、そんな嫌な感覚に襲われていた。

「響……？　顔色が悪いよ……だいじょうぶ？」

よほど酷い顔でもしていたのだろう。隣で同じように立ち尽くしていた未来が、ワタシのことを心配そうに気遣ってくれる。

もしも未来が、ワタシと一緒にこの場所までついて来てくれていなかったら、ワタシは情けなくこの場で泣き崩れてしまっていたかもしれない。
「……大丈夫」
幼馴染にこれ以上余計な心配をかけないよう、ワタシは短く答えてみせてから、そのまま身体を風鳴弦十郎の方へと向けた。
そして一言も発さないまま――ワタシは頭を下げた。
「ひっ、響……!?」
隣で未来の、ビックリしたような声が上がる。
「……ひとまず、理由を訊かせてもらおうか」
頭の上から、そんな弦十郎の声がした。未来ほどではないものの、彼も少なからず困惑しているようだ。ワタシの行動の意図を掴みかねているような、そんな少しの驚きが混じったような声だった。
ワタシは頭を下げたままで、口を開く。
「翼さんがこうなったのも全部……ワタシのせいだから」
「違う。これは翼本人の問題であって、その責任の所在は、万全に装者をサポートすることが出来なかった《二課》の……すなわち、俺の責任だ」
間髪入れずに、弦十郎からのそんな力強い否定が入る。

しかし、ワタシは頭を上げない。
「……ワタシが、ガングニールを自分勝手に使い潰したりしていなかったら、今ごろ翼さんはこうなっていなかった」
「……響」
「――ごめんなさい」
その一言がワタシの口から零れたのと同時に、ポトリと病室の床に冷たい滴が落ちていった。
「ワタ、シの、せいだ……ッ」
水滴は一粒だけでは留まらず、ボロボロと勝手にワタシの顔から零れていく。何度も手で拭っても、それは一向に止む気配がない。
未来がそんなワタシの肩に手を置いて、静かに慰めてくれていた。
すると。
バキィっと。まるで分厚い肉の塊でも打ったような――なにかを殴りつけたみたいな、そんな鈍い音が部屋の中で起こった。
「……？」
一瞬、身体のどこかをぶたれたのかと反射的に思ったワタシだったけれど、いつまで経っても痛みのようなものは感じない。不思議に思って顔を上げてみると、

「……まったく。何を――やっているんだろうな、俺は」
そう言って、口の端から少しの血を流しながら弦十郎が、力のない笑みを浮かべているのが目に入ってきた。彼の頬は赤黒く変色していて、自分で自らの顔面を殴り飛ばしたのだと、少し遅れてからようやくワタシは理解する。
「なっ――なにを……!?」
「コレは先に子供を謝らせてしまった分の、自分への罰さ。まったくもって、大人として自分が情けない」
弦十郎はそう言い終えると、今度はおもむろにワタシに向かって、手を伸ばしてきた。
今度はワタシの番か――そう思って、ぎゅっと目を瞑ったが、訪れたのは頭の上に大きな手を乗せられた、奇妙な感触だけ。
「……え?」
「響くん。君には少し、何でもかんでも自分のせいに考えてしまう悪い癖があるようだ」
――もう一度言うが、これは君のせいなどではない。
大きくて、ごつごつと角ばった、大人らしい逞しい手のひら。それが無骨に、ワタシの頭の上で動いている。
撫でられている、と。すぐにはそう理解出来なかった。
「謝らねばならないのはむしろ、俺のほうだ。それなのにこうして先に謝られてしまっ

ては、いい年した俺の立つ瀬がなくなってしまうな」
弦十郎は悲痛が篭ったような、そんな口調で言葉を続ける。
「三年前に起きた、あのライブ事故で――《ガングニール》という酷な運命を、ただその場に居合わせてしまっただけの、ただの一般人に過ぎなかった君の中に宿らせてしまった。君の人生を大きく捻じ曲げてしまった原因の全ては――聖遺物の起動実験なんてものを画策した日本政府の、そしてその一員である俺にある」
それどころか、俺は君に――命さえも危険に晒してしまうほどの、そんな激しい戦いを強いてしまったんだ。
「いくら謝罪の言葉を折り重ねたところで、君に許してもらえる日が来るとは、俺は思っちゃいない」
「……ッ」
「なにが人類守護の要だ。なにが責任者だ。肩書きばかりが偉くなって、その実は年端もいかない子供の人生を大きく歪ませたまま放置するような、そんなろくでなしの男なんだ」
ワタシの頭の上に乗せられている方とは別の、彼の手がギリッと音を立てた。
「そして挙句の果てには――姪っ子の命さえ、ろくすっぽ守れちゃいない」
本当に情けない――吐き捨てるように、弦十郎は言った。このままいくとまた自分の

顔を殴ってしまいかねないような、そんな激しい感情が篭もった台詞だった。
「そ、そんなこと……っ」
「響君」
弦十郎が、もう一度ワタシの名前を呼ぶ。
「俺にはこんなことを言う資格がないのは、百も承知しているつもりだ。どこまでも傲慢で、恥知らずな行いであることは、十分に理解している――だがどうか、聞いて欲しい」
そして少しの間を置けてから、彼はこう言った。
「君がここに居てくれて――本当によかったと思っている」
――え……？
「どういう、意味……？」
「君が居てくれなければきっと翼は、生きてここへ帰ってくることを諦めていただろう」
そんな弦十郎の言葉に驚いて、ワタシはそこでようやく頭を上げて、相手の顔を見た。
「絶望的なあの状況下において、しかし翼が最後まで諦めることなく、その剣を振るい続けることが出来たのは『君』という存在が、翼の中で確かな拠り所となっていたことが大きい」
そんな、なんで……。

だってワタシは、ずっと今まで翼さんと――

「駆けつけた救助班によれば、アイツは意識を失うその直前まで――」

弦十郎は穏やかに、しかし力強い声でこう告げた。

「君とまた歌を謡いたい――と。そううわ言のように漏らしていたそうだ」

「……ッ!!」

「たしかに君は、一時は俺たち《二課》と対立関係にあったのかもしれない。君にとって、俺は全てを奪っていった張本人であり、恨んで当然の――恨むべき、そんな存在だ」

しかし、と。

彼はワタシの頭から手を引っ込めると、今度はワタシに向かって深々と頭を下げて見せた。

驚いて、如実に固まってしまったワタシに弦十郎は続ける。

「そんな俺への憎しみを――今だけでもいい。ほんの少しだけでも、君の中で後回しにしてもらえるというのならば――頼みを聞き届けてもらえるのなら、どうか――どうかこれからは共に、翼と共に、そして俺たち《二課》と共に、歩みを合わせていってはもらえないだろうか」

ぐっとワタシの前で深く腰を折って、弦十郎。

「……な、なんで」

どうして貴方たちは――こんなに揃いも揃って。自分の声が震えてしまっているのが、嫌でもわかった。
「……ワタシの胸にはもう、ガングニールはない……のに」
「《適合者》としてではなく、これから先を見据えた上で我々の活動には、君の存在が必要だと、そう判断した」
「勝手だ……勝手だよ、そんな理屈……ッ」
「……重々、理解しているつもりだ」
「わ、ワタシにはもう――なにも出来る事なんか、ないのに……ッ！」
「君にしか――出来ないことがある」
弦十郎の力強い言葉に、ワタシはまた自身の視界が滲んでいっていることに気が付いた。
「……ッ、……ッ」
「……響」
隣で未来が、心配そうな目でそんなワタシと、事の成り行きをただ見守ってくれている。
……うん、大丈夫だよ。未来……大丈夫だから……。
「――約束、したから」

やがて。

ワタシは何度か大きく息を整えてから、そして慎重に、ゆっくりと言葉を紡いでいた。

「――あの人の『隣に立つ』って、約束」

だから、そのためだったらワタシは――何だってする。

「……もしも本当に、貴方の言う通り、こんなワタシにもなにか出来る事があると言うのなら――協力させて欲しい」

『それ』は――ずっと今までワタシが何度も拒み続けてきた、そんな選択だった。

『誰かと共に歩む』という――ずっと勇気が出なくて選べなかった、そんな立花響の選択肢。

「……すまない、響君。そして、感謝する」

顔を上げて、まるで憑き物でも落ちたような顔で、いくらか表情を和らげて見せた弦十郎。

ワタシはそんな彼の言葉に、思わず気まずさのようなものを覚えて「……別に」と、また愛想のない態度を取ってしまったのだった。

「――はいはい、湿っぽいお話は無事に終わったのかしらーん？」

そこへ。

「っ!?」
慌ててワタシが声のした方向へと顔を向ければ、そこには白衣を着た、見覚えのある女の人が立っていた。
「ハァイ！　久しぶりねぇ～、響ちゃん」
「了子さん……」
ワタシの代わりに、未来が彼女の名前を口にした。
櫻井了子。
《二課》に所属している女性科学者。ワタシの《ガングニール》や、翼さんの《アメノハバキリ》をはじめとした《シンフォギアシステム》の生みの親。
以前、ワタシが独りでノイズと戦い続けていた頃、何度か顔を付き合わせたことのある人物だった。
「んもう、女の子がそんなコワい顔したりしないの～。せっかくの可愛いお顔が台無しよ～？」
ツカツカとハイヒールの音を響かせながら、こちらへ向かって歩いてくる彼女。
「こうして響ちゃんも正式に、晴れて二課に加わることが決まったんだし、これからは仲良くしましょ？　ねっ？」

そしてワタシの前まで来ると、彼女はスッと握手を求めるように、自分の右手をワタシに差し出してきた。

「……」

ワタシは最初に会ったあのときから、なんだかこの人が苦手だった。飄々としてて、掴みどころのない、何を考えているのか読めない笑い方をする彼女――でも。

以前のワタシなら、きっと無視していただろう。それどころか、もしかしたらこの手を力いっぱい振り払っていたかもしれない。

でも――今は違う……ハズ、なんだ。未来と繋いだこの手は、翼さんと取り合ったこの手は、紛れも無い自分の手だったはずなのだから。

それに、もう差し伸べられた手を払うのは――嫌だ。

握手くらい……なら。

「……やぁーんっ、嬉しいわ～!!」

ワタシは少し悩んでから意を決して、おずおずと彼女の手を控えめに握り返した。

すごく恥ずかしくて、なんだかふわふわとやけに落ち着かない気持ちになった。

「……さっきまでのやり取りを聞いていたのか、了子くん」

「あらぁ？　イイ男はいちいちそんな小さなことを気にしないものなのよ～、弦十郎くんっ」

やれやれと呆れたように首を振る弦十郎に、ウィンクまでしながら微笑んで見せる彼女。あの弦十郎がすっかりやり込められてしまっていた。

やはりこの人はいつも、こんな人を食ったような性格をしているのか……、と。ワタシは早くも、この人と握手したのは早計だったんじゃないかと後悔しそうになった。

「それじゃあ晴れて正式に、響ちゃんを二課メンバーにお迎えしたところで……」

これからに向けた、だーいじなブリーフィングを始めましょうか～。と、

いつもの呑気な調子で、櫻井了子がにっこりとワタシ達にそう告げる。

「響ちゃんだって知りたいんじゃないかしら～？　例えばそうねぇ――どうして、あの翼ちゃんがここまでノイズとの戦闘によって消耗しきってしまっているのか、とか」

「ッ!!」

彼女の言葉に、目を見開いたワタシ。

「翼ちゃんがここまで負担を重ねてしまうことになった本当の原因は、響ちゃんのせいでも、ましてや弦十郎くんのせいでもないわ。現状の問題点はもっと別のところにある」

櫻井了子は声の調子こそ変えないままで、続けた。

「――多すぎるのよ、いくらなんでも。ここ最近に起こっている、ノイズの発生件数が」

彼女は一切の淀みなく、そう言った。

「それは、わたしが欧州へと極秘任務に出向していて《二課》を離れていた、少し前のこと――《並行世界》からやってきたという、三人のシンフォギア装者と共に、響ちゃんたちが直面したという《カルマノイズ事変》……」

それこそが他でもない遠因となって――今回の事態は引き起こされていると、わたしはそう睨んでいるわ。

櫻井了子はそう言った。

ざわりと。ワタシの胸の奥で嫌な感触が駆け抜けていく。自分の知らないところで、なにか取り返しのつかないことが起きてしまっているような、そんな感覚。

「……っ」

ワタシの隣に立っていた未来が少し怯えたように、息を呑みながらワタシの袖口を掴んでいた。

櫻井了子は言った。

「とにかく、ここじゃあ治療中の翼ちゃんに悪いから、部屋を変えてお話しましょうか？」